

資料紹介

戦後のわが国におけるエンゲルス研究文献について

坂 脇 昭 吉

On the Literature on Engels in the Post-War Japan

Akiyoshi Sakawaki

目 次

I は じ め に

II 総 記

(1) 伝記類 (2) 辞典 (3) 原典解説

III エンゲルス研究文献

(1) 初期エンゲルス (2) 後期エンゲルス (3) 弁証法的唯物論 (4) 自然弁証法 (5) 史的唯物論 (6) 経済学一般 (7) 農業・地代論 (8) 労働問題 (9) 国家・政治論 (10) 生誕150年記念文献

I は じ め に

本紹介は、前稿「戦前のわが国におけるエンゲルス研究文献について—エンゲルス生誕150年によせて—」(『千里山経済学』第4号、関西大学大学院、昭和45年10月)のいわば後篇をなすものであって、昭和21年から45年12月までの25年間にわが国で発表されたエンゲルスに関する研究文献を紹介したものである。しかしながら、本稿作成にあたっての要領は前稿と幾分異っているので次に記しておく。

〔1〕本稿は、前稿と同様エンゲルスに関する研究文献の紹介を主たる目的としているので、エンゲルスの書いた著書及び論文の翻訳の紹介は除いているが、しかし今回は特に、著作解題や、翻訳のあとに附されている「解説」類を紹介することにした。

〔2〕本稿ではまた、前稿のように「エンゲルスと……」といったようなエンゲルスの業績そのものを研究の対象にした文献以外にも、「マルクス・エンゲルスと……」といったものでも、つまりその内容において、エンゲルスの思想及び学説が明確にされているものや、マルクスとの比較の上で、エンゲルスがとりあげられているものについても努めて紹介することにした。

〔3〕掲載の方法としては、まず各項目について主な文献の内容の概略を紹介し、その次に年代順に文献を掲載した。そして、辞典にエンゲルスのことを書いたものや、いわゆる原典解説類については、機械的に紹介するにとどめた。それぞれの項目の区分の仕方については、必ずしも適当なものとは考えていないが、整理の都合上一応の区分を行なったにすぎない。当然ながら戦前のものとは若干区分の仕方変っている。また、文献蒐集上の統一性と

厳密性とに若干欠けている点のあることも断っておかねばならない。不備な点は、今後、「戦前」のものをも含めて整備してゆきたいと思っている。大方の御教示がいただければ幸いである。

〔4〕 エンゲルス生誕 150 年を記念して発表されたものについては、昭和 46 年 1 月あたりまでに発表されたものを若干の内容を紹介しながら最後にまとめて項目別に掲載した。

〔5〕 文中の敬称は略させていただいた。

II 総 記

(1) 伝 記 類

戦後になるとエンゲルスを独自に扱った本格的な「エンゲルス伝」が、わが国の研究者の手によって書かれることになる。戦後のエンゲルス研究の深化と多様化の象徴的な現象の 1 つである。つまり、戦前カウツキーの『エンゲルス小伝』を訳した大内兵衛が、雑誌『世界』に 3 回にわたって連載した「エンゲルス小伝」¹⁾がまずそれである。「小伝」は文字通りそれほど長いものではないが、エンゲルスをマルクスよりも低くみることに抗議したメーリングの言葉などを引用しながら、エンゲルスの主要著作の簡潔な解説と、その執筆の際の事情などを中心に、マルクス主義理論の形成と宣伝に対するエンゲルスの貢献ぶりや、マルクスへの暖かい友情などを紹介している。そして、そうしたことを通じて全体として、エンゲルスの豊かな人間像が描きだされている。

次に、著書として、わが国ではじめて書かれたものとして意義深い土屋保男の『フリードリヒ・エンゲルス』²⁾がある。これは「エンゲルスの理論と実践の重要な諸部門の解明にまでわた」(「まえがき」)っていないために、若干ものたりなさが残るとはいえ、「なにゆえに、またいつ、どこで、どのようにしてマルクスの無二の同志エンゲルスは共産主義者になっていったのか?、そして共産主義とはいったいエンゲルスにとってなんだったのか?」(同)といった問題を中心に、「若きエンゲルスの苦しみとたたかひの前進をあとづけ」(同)、初心者にも親しめるように、エンゲルスの日常生活と、彼の理論的發展のあとを平易に紹介している。

また、エンゲルスの「人と学説」を簡明に述べたものに金子ハルオの「エンゲルス」³⁾がある。これは、「エンゲルスの前半生と主要著作」、「エンゲルスの後半生と主要著作」、「マルクス主義の理論的構造」、「経済学説; 剰余価値論」とから成っているが、後半の「学説」はマルクスのそれを紹介するにとどまっておき、前半の「半生と著作」でも、エンゲルスのそれを一応紹介するに終っているために、特に注目すべき点はみあたらないが、ただマルクスを経済学の研究へ向かわせたのは他ならぬエンゲルスの『国民経済学批判大綱』であったのであり、その点で「マルクス主義の経済学研究を完成したのはマルクスであったが、それに着手したのはエンゲルスの方が先であった。」(187 ページ)と述べている点が印象に残った。

他に、翻訳ではあるが、エンゲルス伝として決して忘れることのできないものに、「スイス、バーゼルのムンドウス書肆が 1945 年に、エンゲルスの歿後 50 年を記念し、ソヴェート大百科辞典の総編集 O. J. シュミット教授の承認を得て、同辞典の新版所収のエンゲルスにかんする論文を集め、これにエンゲルスの略年譜、文献、註を附して発行した『思想家フリードリヒ・エンゲルス』を訳した」(「あとがき」)高山洋吉訳『フリードリヒ・エンゲルス』⁴⁾と、ヴァルター・ヴィクトル・小島恒久、原田溥訳「フリードリヒ・エンゲルス—最良の友—」⁵⁾とがある。後者の方は、「東ドイツで青年向けの伝記として出版されたもので……原本は 1 冊ではなく、マルクスとエンゲルスとで別々の巻になっており」(「訳者あとがき」)、それを 1 冊にして邦訳したものである。章別構成は、第 1 章「エンゲルスの育った町」、第 2 章「エンゲルスの徒弟、学生、兵士時代」、第 3 章「イギリスでの決定的体験」、第 4 章

「友情と世界を変革する哲学の開始」, 第5章『「共産党宣言」』, 第6章「1848年革命と『將軍』エンゲルス」, 第7章「第2 ヴァイオリン, エンゲルスと小供たち」, 第8章「思想家としてのエンゲルス」, 第9章「国際労働運動の指導」, 第10章「エンゲルスは死んだがその教えは生きている」であるが, 第8章で彼はエンゲルスの『猿の人間化における労働の役割』の中の一節を引用しながら, エンゲルスの労働観について次のように述べている。「フリードリヒ・エンゲルスは労働を, 全人間生活の第1の根本条件と呼んでいる。……今日よくいわれるような, 現実の思考する人間や, 手や足にかんする問題はエンゲルスによってはじめて与えられたのである。……フリードリヒ・エンゲルスは手労働は, 道具の作成とともに始まったこと, そして結局, 脳髓の完成によって手や言語に次いで, 頭脳が特別の役割を演じはじめたこと, これらの事実の研究にむかっている」(167~170ページ)。

最後に, エンゲルス歿後60周年を記念して発表されたものとして, エンゲルスがドイツ民族の統一, 平和的対外政策を主張し, 軍縮を一貫して主張したと説く松本惣一郎の論文⁶⁾や, 昭和30年8月4日, 5日に『アカハタ』に載った論文⁷⁾⁸⁾, さらに, エンゲルスが理論及び実践の両面にわたって, 労働運動, 社会主義運動にかぎらない役割をはたしたと評価する『アインハイト』の「主張」⁹⁾などがある。また後のⅢの(6)「経済学一般」のところできりあげる杉原四郎の論文も, エンゲルス歿後60周年を記念して発表されたものである。

- 1—4) ムンドウス編・高山洋吉訳『フリードリヒ・エンゲルス』(青木文庫, 昭和28年6月, Sowjet-Enzyklopädie: „Friedrich Engels, der Denker“ Basel, 1945)
- 2—6) 松本惣一郎「偉大な愛国者フリードリヒ・エンゲルス—エンゲルスの死後60周年にあたって—」(『前衛』, 昭和30年8月号)
- 3—7) 無署名「科学的社会主義をきずきあげた人・エンゲルス—八月五日は死後60年—」(『アカハタ』, 昭和30年8月4日)
- 4—8) 無署名「エンゲルス死去60周年を記念して」(『アカハタ』「主張」, 昭和30年8月5日)
- 5—9) 向坂逸郎抄訳「カール・マルクスの戦友であり, 科学的社会主義の共同創始者であったフリードリヒ・エンゲルス」(『国際資料』No. 22, 国民文庫[これは発行所名で現在の国民文庫とは全く別のもの—坂脇]昭和31年2月号 „Friedrich Engels—Kampfgenosse von Karl Marx und Mitbegründer des wissenschaftlichen Sozialismus“ Einheit, 10, Jahrgang, 1955, Heft 8.)
- 6— 向坂逸郎「フリードリヒ・エンゲルス」(同『マルクス伝』第15章, マルクス・エンゲルス選集13, 新潮社, 昭和37年5月)。これは戦前向坂が『中央公論』に書いた「フリードリヒ・エンゲルス論—8月5日を記念して—」に若干手を加えたものである。
- 7—1) 大内兵衛「エンゲルス小伝(上), (中), (下)」(『世界』224~226号, 昭和39年8~10月), これは後, 同『マルクス・エンゲルス小伝』(岩波新書, 昭和39年12月)に収録された。
- 8—3) 金子ハルオ「エンゲルス」(『経済往来』「人と学説(8)」, 昭和40年4月号)
- 9—5) ヴァルター・ヴィクトル・小島恒久, 原田溥訳「フリードリヒ・エンゲルス—最良の友—」(同・長坂, 小島, 原田共訳『マルクス・エンゲルス小伝』[第2部]87~190ページ, 労大新書, 昭和41年2月)
- 10—2) 土屋保男『フリードリヒ・エンゲルス—若き日の思想と行動—』(新日本新書, 昭和44年7月)。これは以前同氏が『月刊学習』(昭和42年4~6月, 9~11月)に連載したものを書き改めたものである。

次に、戦後数多く出版された辞書類にもエンゲルスに関するものが1つの項目としてとりあげられているのだが、そうしたもののなかから執筆者が明記されているものを中心に紹介することにしよう。

- 1— 宮川実「エンゲルスの生涯と著作」(日本経済機構研究所編『政治経済大辞典』「第2部—社会, 政治, イデオロギー—マルクスとエンゲルスⅡ」, 岩崎書店, 昭和24年5月)
- 2— 山崎謙「ヘーゲル弁証法とマルクス・エンゲルス」(『同上』「第2部—哲学におけるマルクス・レーニン主義の発達」)
- 3— 小松撰郎「イデオロギー」, 玉城肇「家族」, 戸沢鉄彦「国家」, 有泉享「私有財産」, 松村一人「弁証法」, 鈴木安蔵「暴力」, 石田英一郎「唯物史観」(『社会科学辞典』, 河出書房, 昭和24年11月)
- 4— 林直道「エンゲルス」(大阪市立大学経済研究所編『経済学小辞典』, 岩波書店, 昭和26年6月, 増訂版昭和30年2月)
- 5— 及川朝雄「エンゲルス—自然弁証法, 反デューリング論, フォイエルバッハ論」(『哲学名著解題』, 春秋社, 昭和30年4月)
- 6— 林健太郎「エンゲルス」(下中弥三郎編『世界歴史辞典』3, 平凡社, 昭和30年5月)
- 7— 松村一人「エンゲルス」(福武直, 日高六郎, 高橋徹編『社会学辞典』, 有斐閣, 昭和33年4月)
- 8— 塚本健「エンゲルス」(『国民百科事典』I, 平凡社, 昭和36年2月)
- 9— 越村信三郎「フリードリヒ・エンゲルス」(新明正道監修『新版社会思想史辞典』「近代・現代社会思想—マルクス主義—『人名項目』」, 創元社, 昭和36年12月)
- 10— 堀江忠男「エンゲルス」(昭和出版研究所編『日本百科大辞典』, 小学館, 昭和37年11月)
- 11— 川鍋正敏「エンゲルス」(小林昇編『経済学史小辞典』, 学生社, 昭和38年6月)
- 12— 鈴木鴻一郎「エンゲルス」(『世界大百科事典』3, 平凡社, 昭和39年11月), 植木文雄「共産党宣言」(『同』6, 昭和40年6月), 藤間生大「原始共産制」(『同』7, 昭和40年8月), 原光雄「自然弁証法」(『同』10, 昭和40年12月), 沼野井春雄「せいめい—[エンゲルスの生命論]」(『同』13, 昭和41年10月), 船山信一「フォイエルバッハ論」(『同』19, 昭和42年6月), 中村秀吉「弁証法的唯物論」(『同』20, 昭和42年7月)
- 13— 杉本俊朗「エンゲルス」(大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』, 岩波書店, 昭和40年9月)
- 14— 中川甲子三郎「エンゲルス」(『原色現代新百科事典』, 学習研究社, 昭和42年8月)
- 15— 高野利治「エンゲルス」(『ジャポニカ・大日本百科事典』, 小学館, 昭和43年5月)
- 16— 山田宗睦「エンゲルス」(『社会科学大事典』2, 鹿島研究所出版会, 昭和43年6月)
- 17— 坂本賢三「しぜんべんしょうほう, 自然弁証法」(『同』9, 昭和44年8月)
- 18— 無署名「エンゲルス—アンチ・デューリング論, 空想より科学へ, 弁証法と自然, 家族, 私有財産, 国家の起源」(荒正人, 村上政之編『世界人名百科辞典』, 河出書房, 昭和28年11月)
- 19— “ 「エンゲルス」(下中邦彦編『哲学事典』, 平凡社, 昭和29年1月)

(3) 原典解説 (エンゲルス独自の執筆になるもの)

〔総合的なもの〕

- 1— 猪木正道「解説」(猪木正道, 小林茂夫訳『独仏年誌論集—マルクス・エンゲルス初期論文集—』, 社会思想研究会出版部, 昭和23年10月)。これは後『原始マルクス主義』として改題され, 昭和24年10月に重

版された。本書のエンゲルス関係収録文献は「経済学批判要綱」,「英国の現状」である。

2— 向坂逸郎監修, 歴史科学研究所編『マルクス・エンゲルス著作解題』(黄土社, 昭和24年10月)。これは, マルクス; エンゲルスの主要文献を(1)ケルン—パリー—ブリュッセル時代(1842~47年), (2)共産主義者同盟時代(1847~50年), (3)ロンドン亡命初期(1850~64年), (4)第1インターナショナル時代(1864~74年), (5)マルクス晩年よりエンゲルスの死まで(1875~95年)の5つの時期に分け, それぞれの時期に書かれた文献について簡潔な解題をおこなったものである。エンゲルス文献解説の分担は次の諸氏である。

- 大内 力「経済学批判大綱—1844年」, 「イギリスの状態—1844年」, 「ドイツ農民戦争—1850年」, 「空想から科学へ—1880年, 附, 序文『史的唯物論について』—1892年, 附, マルク—1882年」, 「ヴォルフ『シュレーゲンの10億』への序文—1885年」, 「フランスおよびドイツにおける農民問題—1894年」
 - 真板謙蔵「イギリスにおける労働者階級の状態—1845年」
 - 相原茂「共産主義の原則—1847年」
 - 大島清「保護貿易制度か自由貿易制度か—1847年」, 「保護関税と自由貿易—1888年」, 「弁証法と自然—1872~94年, 附, 猿の人類化への労働の関与—1878年」, 「賃銀法則—1880年」, 「正当なる労働に対する正当なる賃銀—1881年」
 - 林健太郎「ドイツ帝国憲法戦役—1850年」, 「ポーとライン—1895年」, 「サヴォヤ・ニースおよびライン—1860年」, 「プロシア軍事問題とドイツ労働者党—1865年」, 「権力原理について—1872年」, 「ロシア社会論—1875年」, 「ドイツ帝国議会におけるプロシアの火酒—1876年」, 「新ドイツ帝国建設の際における強力と経済—1877~88年」
 - 対馬忠行「ドイツにおける革命および反革命—1851~52年」, 「1852年における神聖同盟の対仏戦争の可能性と前提—1852年」, 「ブランキー派コンミュン亡命者の綱領—1874年」, 「エルフルト綱要草案批判—1891年」
 - 向坂逸郎「フォクト氏, 附, フォクト氏再論—1871年」
 - 鈴木鴻一郎「『資本論』紹介並びに解説—1867~94年, 附, 資本論第1巻綱要—1867年」
 - 近江谷左馬之助「戦役雑記—1870~71年」
 - 北原実「住宅問題—1877~78年」
 - 武田隆夫「反デューリング論—1877~78年」
 - 揖西光速「家族, 私有財産および国家の起源—1884年」
 - 佐木秋夫「フォイエルバッハ論—1886年」
- 3— 『マルクス=エンゲルス選集』全18巻, 補巻5冊(マルクス=レーニン主義研究所編—途中からマルクス=エンゲルス選集刊行委員会編に変わる—, 大月書店, 昭和24年11月~27年7月)の各巻末の無署名「解説」
- 4— マルクス=レーニン主義研究所「解説」(ソ連邦共産党中央委員会附属マルクス=レーニン主義研究所編, マルクス=レーニン主義研究所訳『マルクス=エンゲルス選集』全8冊, 大月書店, 昭和30年5月~31年1月)。以下本『選集』のエンゲルス関係の収録文献を掲げておく。
- 第3冊—
「カール・マルクス『経済学批判』書評」

- 第4冊—
「マルクスの『資本論』書評」, 「『資本論』第2巻序文から」
 - 第5冊—
「住宅問題」, 「権威論」, 「『ドイツ農民戦争』序文」, 「ロシアの社会事情」, 「『自然弁証法』序論」, 「猿が人間になるについての労働の役割」, 「空想から科学への社会主義の発展」, 「カール・マルクス」, 「カール・マルクスの葬送の辞」
 - 第7冊—
「家族, 私有財産および国家の起源」, 「マルクスと『新ライン新聞』(1848~1849年)」, 「共産主義者同盟の歴史によせて」, 「ルードヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」, 「フランスとドイツの農民問題」
- 5—岡崎次郎「解説」(『世界大思想全集—社会・宗教・科学思想編13, 「エンゲルス」, 河出書房, 昭和30年12月5日)
- 本書のエンゲルス関係収録文献は次の通り。
- 「空想から科学への社会主義の発展」, 「家族, 私有財産および国家の起源」, 「ルードヴィヒ, フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終末」, 「猿から人類への移における労働の役割」, 「唯物史観に関する手紙」, 「共産主義の諸原理」, 「共産主義者同盟の歴史」
- 6—向坂逸郎「解説」(大内兵衛, 向坂逸郎監修『マルクス=エンゲルス選集』全16巻, 新潮社, 昭和31年4月~37年5月)。この「巻末解説」のエンゲルス関係収録文献は次の通り。
- 〔第1巻〕「経済学批判大綱」, ○〔第2巻〕「イギリスにおける労働者階級の状態」, ○〔第5巻〕「共産主義の原理」, 「マルクスと新ライン新聞」, ○〔第6巻〕「ドイツにおける革命と反革命」, ○〔第7巻〕「『経済学批判』について」, ○〔第8巻〕「資本論綱要」, 「『資本論』第3巻補遺」, 「マルクスの『資本論』」, 「賃金法則と労働組合」, 「住宅問題」, ○〔第9巻〕「家族, 私有財産と国家の起源」, 「エルフルト綱領批判」, 「ブランキスト批判」, ○〔第10巻〕「ドイツ農民戦争」, 「新ドイツ帝国建設の際の強力と経済」, ○〔第11巻〕「反デューリング論(1)」, ○〔第12巻〕「反デューリング論(2)」, 「自然弁証法」, 「空想より科学への社会主義の発展」, 「史的唯物論について」, 「原始キリスト教の歴史について」, 「フォイエルバッハ論」, 「カール・マルクス」, 「マルクス送葬の辞」
- 7—ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所, 村田陽一訳「序文」(ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所編, 大内兵衛, 細川喜六監訳『マルクス=エンゲルス全集』全40巻, 45冊, 現在邦訳続行中。Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1956—大月書店, 昭和34年10月~)
- 8—向坂逸郎「解説」(『世界の大思想II—5, 「エンゲルス」, 社会, 哲学論集」, 河出書房, 昭和42年8月)。
なお本書には別に各訳者による「解題」がついているので, それは次の〔個別的なもの〕のところで紹介する。本書の収録文献は次の通り。
- 「共産主義の諸原則」, 「住宅問題」, 「空想より科学への社会主義の発展」, 「家族, 私有財産および国家の起源」, 「フォイエルバッハ論」, 「自然弁証法(抄)」, 「猿から人間への移行における労働の役割」, 「唯物史観にかんする手紙」。なお, 本書の巻末には渡辺寛による「エンゲルス年表」がついていて便利

である。

- 9— ペ・エヌ・グルズデフ、大橋精夫訳「解説」（ペ・エヌ・グルズデフ編、大橋精夫訳『マルクス＝エンゲルス教育論』2，世界教育学選集，明治図書出版，昭和43年10月）。なお，本書1，2を通してエンゲルスが書いた作品の収録文献は次の通りである。
- 〔第1冊〕「ヴッパータールだより」（1839年），「エルンスト・モーリッツ・アルント」（1840），「A・ルーゲへの手紙から」（1842），「ロンドンだより」（1843），「イギリスの状態—トマス・カーライル『過去と現在』，ロンドン，1843年」（1844），「近代に成立し今も存続している共産移住地の記述」（1844），「イギリスにおける労働者階級の状態」（1844～1845），「ドイツにおける共産主義の急速な進展」（1845），「エルバーフェルトにおける2つの演説(一)」（1845），「共産主義の原理」（1847），「フランクフルトにおけるポーランド討論」（1848），「ドイツ農民戦争」（1850），「軍隊」（1857），「プロイセンの軍事問題とドイツ労働者党」（1865）
 - 〔第2冊〕『「ドイツ農民戦争」第2版への序文』（1870），「権威について」（1872～'73），「ポーランド人の声明」（1874），「ライプツィヒ在住のアウグスト・ベーベルへの手紙から」（1875），「空想から科学への社会主義の発展」（1877～1880）及び英語版への序文「自然弁証法」（1873～1886），「反デューリング論」（1878），「ピアリッツ在住の M. K. ゴルブノワーカブルコワ夫人への手紙」（1880），「パリ在住の M. K. ゴルブノワーカブルコワ夫人への手紙」，「マルクスの送葬にあたって」（1883），「チューリッヒ在住のアウグスト・ベーベルへの手紙から」，「ライプツィヒ在住のアウグスト・ベーベルへの手紙から」（1885），「ホボケン在住の F. A. ゴルゲへの手紙から」，「ルードヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」（1886），「歴史における強力の役割」（1888），「1891年の社会民主党綱領草案の批判」，「ベルリン在住のアウグスト・ベーベルへの手紙から」（1891），「ヨーロッパは軍備を撤廃しうるか？」，「国際社会主義学生大会挨拶」（1893），「H・シュタルケンベルグへの手紙から」（1894）
- 10— 中村丈夫「编者あとがき」（同編『マルクス主義軍事論 1848・1871・1905・1917』，鹿砦社，昭和44年10月）。本書のエンゲルス関係収録文献は次の通り。
- 「1848～49年革命の軍事問題」，「6月革命」，「ウィーンの強襲—ウィーンの裏切」，「蜂起」，「遊撃戦論—フランス—プロイセン戦争『戦況時評』から」，「パリ，コミューンの軍事問題」，「コミューンの軍隊—総評議会会議議事録から」，「武装した労働者権力—『フランスにおける内乱』1891年序文から」，「将来の市街戦—『フランスにおける階級闘争』1895年序文から」。
- 〔個別的なもの〕
- 『国民経済学批判大綱』（1844年）
- 11— 高島善哉「国民経済学批判大綱」（下中弥三郎編『世界名著大事典』II，平凡社，昭和35年4月）
- 12— 川鍋正敏「国民経済学批判大綱」（前掲『経済学史小辞典』，28ページ）
- 『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）
- 13— 大内力「イギリスにおける労働者階級の状態」（前掲『世界名著大事典』I，昭和35年2月）
- 14— 川鍋正敏「『イギリスにおける労働者階級の状態』」（前掲『経済学史小辞典』，28ページ）
- 『共産主義の原理』（1847年）
- 15— 宮川実「解説」（同訳『共産主義の原理』，青木文庫，昭和27年5月）

- 16— 国民文庫編集委員会「解説」（マルクス＝レーニン主義研究所訳『共産党宣言，共産主義の原理』，国民文庫版，昭和27年7月）
- 17— 岡崎次郎「解題—エンゲルス共産主義の諸原則（なお，これには『共産主義者同盟の歴史』1885年も同時に解説されている）」，（桑原武夫他4名編『世界思想教養全集11，「マルクスの政治思想」』，河出書房新書，昭和37年8月）
- 18— 阪本英夫『『共産主義の原理』から学ぶ』（古典研究会編『マルクス・レーニン主義の古典から学ぶ1，「第2話」』，青年出版社，昭和41年11月）
- 19— 岡崎次郎「エンゲルス—共産主義の諸原則」（前掲『世界の思想Ⅱ—5』「解題」，昭和42年8月）
○『ドイツ農民戦争』（1850年）
- 20— 大内力『『ドイツ農民戦争』の研究』（『唯物史観』4，昭和23年12月）
- 21— 同 「解説」（同訳『ドイツ農民戦争』，岩波文庫，昭和25年9月）。なおこれは上記『唯物史観』の論説を再録したものである。
- 22— 井上清「エンゲルス著『ドイツ農民戦争』」（『歴史学研究』No. 143，「書評」，昭和25年）
- 23— 国民文庫編集委員会「解説」（伊藤新一訳『ドイツ農民戦争』，国民文庫版，昭和28年11月）
- 24— 松田智雄「ドイツ農民戦争」（前掲『世界名著大事典』IV，昭和35年9月）
- 25— 原昭午「エンゲルス『ドイツ農民戦争』」（『歴史評論』No. 206，「歴史の名著」，校倉書房，昭和42年10月）
○『革命と反革命』（1851年）
- 26— 武田隆夫「1848～49年のドイツ—エンゲルスの『革命と反革命』を読む」（『唯物史観』4，昭和23年12月）
- 27— 国民文庫編集委員会「解説」（村田陽一訳『革命と反革命』，国民文庫，昭和28年8月）
- 28— 武田隆夫「解説」（同訳『革命と反革命』，岩波文庫，昭和30年1月）。なお，これは同氏が先の『唯物史観』に掲載したものとほぼ同じ内容である。
- 29— 勝部元「革命と反革命」（前掲『世界名著大事典』I，昭和35年2月）
○『『資本論』第1巻綱要』（1868年）
- 30— 時永淑「解題—エンゲルス『資本論』綱要」（前掲『世界思想教養全集』12，昭和37年4月）
○『住宅問題』（1872年）
- 31— 大内兵衛「エンゲルスの『住宅問題』解題」（『唯物史観』3，河出書房，昭和22年4月）
- 32— 同 「解説」（同訳『住宅問題』，岩波文庫，これは上記のものを再録したもの）
- 33— 川鍋正敏『『住宅問題』』（前掲『経済学史小辞典』，28ページ）
- 34— 高橋正雄他5名「エンゲルス『住宅問題』をめぐる—高橋理事を囲んで—」（『フェビアン研究』Vol. 14，No. 11，昭和38年11月）
- 35— 岡崎次郎「エンゲルス—住宅問題」（前掲『世界の思想Ⅱ—5「エンゲルス」』，昭和42年8月）
○『自然の弁証法』（1873～83年）
- 36— 有沢広己「訳者あとがき」（同訳『自然弁証法』，黄土社，昭和23年5月）
- 37— 原光雄「訳者あとがき」（同訳『自然弁証法』，三一書房，昭和24年7月）—この「あとがき」は次の順序で書かれている。1. 「エンゲルス自身による手稿の類別と本書の章別との照表」，2. 「1914年刊のロシア語

- 版における配列順序」, 3. 「初学の方々への注意」。また本訳書には, リヤザノフの「解題」がついている。
- 38— マルクス・エンゲルス・レーニン研究所・田辺振太郎訳「解説」(田辺訳『自然の弁証法』下巻, 岩波文庫, 昭和32年10月)
- 39— 田辺振太郎「自然の弁証法」(前掲『世界名著大事典』Ⅲ, 昭和35年6月)
- 40— ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所・菅原仰訳「解説」(菅原訳『自然の弁証法』〔1〕, 国民文庫, 昭和45年3月)
- 「サルが人間になるにあたっての労働の役割」(1876年)
- 41— 橋本貢「『猿が人間になるについての労働の役割』から学ぶ」(前掲『マルクス・レーニン主義の古典から学ぶ』1, 昭和41年11月)
- 42— 伊藤嘉昭『原典解説「サルが人間になるにあたって労働の役割」』(マルクス・レーニン主義入門叢書, 青木書店, 昭和42年1月)
- 43— 岡崎次郎「エンゲルス—猿から人間への移行における労働の役割」(前掲『世界の大思想Ⅱ—5』, 昭和42年8月)
- 『反デューリング論』(1876～78年)
- 44— 栗田賢三「解説」(同訳『反デューリング論』(上), 岩波文庫, 昭和27年4月)
- 45— 岡崎三郎「『反デューリング論』について—初学の人のために—」(『社会主義』59, 昭和31年7月)
- 46— マルクス・レーニン主義研究所, 村田陽一訳「解説」(同訳『反デューリング論』, 大月書店, 昭和31年10月)
- 47— 村田陽一「解説」(同訳『反デューリング論』(2), 国民文庫, 昭和35年9月)
- 48— 栗田賢三「反デューリング論」(前掲『世界名著大事典』Ⅴ, 昭和35年11月)
- 49— 川鍋正敏「『反デューリング論』」(前掲『経済学史小辞典』28～29ページ)
- 『空想から科学への社会主義への発展』(1880年)
- 50— 加藤正訳著『解説—空想から科学へ』(三一書房, 昭和23年10月, 新版, 季節社, 昭和45年9月)
- 51— 大内兵衛「解説」(同訳『空想より科学へ』, 岩波文庫, 昭和29年)
- 52— 小松撰郎「空想より科学へ」(前掲『世界名著大事典』Ⅱ, 昭和35年4月)
- 53— 川口武彦「解題—エンゲルス空想より科学への社会主義の発展」(前掲『世界思想教養全集』11, 昭和37年8月)
- 54— 寺沢恒信『原典解説—空想から科学へ』(マルクス・レーニン主義入門叢書, 青木書店, 昭和40年11月)
- 55— 同「解説」(同訳『新訳・空想から科学へ』, 国民文庫, 昭和41年5月)
- 56— 若林暹「『空想から科学への社会主義の発展』から学ぶ」(前掲『マルクス・レーニン主義の古典から学ぶ』1, 昭和41年11月)
- 57— 白井厚「『空想より科学へ』講義」(未来社, 昭和42年5月)
- 58— 大崎平八郎「解説」(同訳『空想から科学へ—社会主義の発展—』, 角川文庫, 昭和42年7月)
- 59— 川口武彦「エンゲルス—空想より科学への社会主義の発展」(前掲『世界の大思想Ⅱ—5』, 昭和42年8月)
- 60— 高橋正雄訳著『空想から科学へ—いかに読むべきか』(現代教養文庫, 社会思想社, 昭和42年11月)
- 『家族, 私有財産および国家の起源』(1884年)
- 61— 国民文庫編集委員会「解説」(村井康男, 村田陽一訳『家族, 私有財産および国家の起源』, 国民文庫, 昭

和 29年 3月)

- 62— 小山隆「家族，私有財産および国家の起源」(前掲『世界名著大事典』I，昭和 35年 2月)
 63— 佐藤進「解題—エンゲルス—家族，私有財産および国家の起源」(前掲『世界思想教養全集』，昭和 37年 8月)
 64— 戸原四郎「解説」(同訳『家族，私有財産および国家の起源』，岩波文庫，昭和 40年 10月)
 65— 原秀三郎「エンゲルス『家族，私有財産および国家の起源』」(『歴史評論』No. 204，「歴史の名著」，昭和 42年 8月)
 66— 佐藤進「エンゲルス—家族，私有財産および国家の起源」(前掲『世界の思想Ⅱ—5』，昭和 42年 8月)
 67— 畑田重夫『原典解説—家族，私有財産および国家の起源』(マルクス・レーニン主義入門叢書，青木書店，昭和 43年 12月)

○『フォイエルバッハ論』(1886年)

- 68— 船山信一「エンゲルスの『フォイエルバッハ論』」(『哲学評論』2巻 2号，「古典解説」，民友社，昭和 22年 5月)
 69— 佐久 登「フォイエルバッハ論稿解説」(『新しい世界』15号，昭和 23年)
 70— 佐藤和夫「フォイエルバッハ歴史認識—エンゲルス『フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』について—」(前掲『哲学評論』3巻 4号，「古典解説」，昭和 24年)
 71— 野田弥三郎「解説」(同訳『フォイエルバッハ論』，青木文庫，昭和 27年 7月)
 72— 国民文庫編集委員会「解説」(藤川覚訳『フォイエルバッハ論』，国民文庫，昭和 29年 5月)
 73— 松村一人「解説」(同訳『フォイエルバッハ論』，岩波文庫，昭和 35年 5月)
 74— 栗田賢三「フォイエルバッハ論」(前掲『世界名著大事典』V，昭和 35年 11月)
 75— 森宏一『原典解説—フォイエルバッハ論』(マルクス・レーニン主義入門叢書 V，青木書店，昭和 40年 11月)
 76— 長坂聡「エンゲルス—フォイエルバッハ論」(前掲『世界の思想Ⅱ—5』，昭和 42年 8月)

○「原始キリスト教の歴史によせて」(1894~95年)

- 77— 佐木秋夫「原始キリスト教の歴史によせて」(前掲『世界名著大事典』II，昭和 35年 4月)

○「唯物史観に関する書簡」(1875年 11月~1894年 1月)

- 78— 生松敬三「唯物史観に関する書簡」(前掲『世界名著大事典』VI，昭和 36年 3月)

○「マルクス『フランスにおける階級闘争』への序文」(1895年)

- 79— 中山誠一「エンゲルス『マルクス「フランスにおける階級闘争」への序文』」(『月刊学習』No. 113，「原典独習案内」，日本共産党中央委員会，昭和 45年 4月)

III エンゲルス研究文献

まずわれわれは，戦後のエンゲルス研究の 1つの特徴として，エンゲルスの個々の作品や諸説を検討するということの他に，思想家としてのエンゲルスの統一的な全体像を描き出そうとする動きを指摘しうるのであろう。例えば，山之内靖はその著『マルクス・エンゲルスの世界史像』¹⁾のなかで次のように述べている。「……歴史具体的分析や綱領類，あるいは手紙類等からはじめて引き出してくることができるので，世界史の現実的動態にかかわる彼らの思想的・方法的立場については，これまでのところ，体系的に整理しようとする努力があまり欠けてきた。勿論，そうした努力がまったく欠けていたという非難は当を失するであろうが，なされた努力の多くは，例えば，マルクス・エンゲルスの 2月革命論，3月革命論，アジア的生産様式論，アメリカ論，ロシア論，

イギリス論、民主主義革命論、等々といったふうに、個々バラバラに切り離して論じたものにすぎなかった。これらすべての論議は、ひとつひとつとりあげてみた場合にもまとまったテーマをなしていたことは勿論であるが、マルクス・エンゲルスにあっては、実は同時に、全く切り離しては論じ得ない全体的統一性のなかで取り扱われていたのであり、そのことを抜きにしては意味のないテーマなのであった。]（「まえがき」）他に、エンゲルスの全体的思想の把握をめざして、その準備作業が杉原四郎によってなされつつある。

- 1— 松下 律「マルクス主義とエンゲルス」（『政経時潮』2巻11号、昭和23年）。これは未見のため一応ここに掲載するにすぎない。
- 2—1) 山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』（未来社、昭和44年1月）
- 3— 杉原四郎「エンゲルス雑感」（『未来』、昭和44年9月号）
- 4— 同 「エンゲルス研究の動向」（『思想』、昭和45年3月号）
- 5— 同 「エンゲルスの統一的全体像をもとめて（上）、（下）」（『思想』、昭和45年11月、12月号）

(1) 初期エンゲルス

しかしながら、エンゲルスの全体像を探究していくためには、以下に紹介するような各分野での多くの研究が正しく評価されていかねばならないこともまた事実であろう。そこで以下順を追って戦後におけるエンゲルス研究文献を紹介してゆくのだが、まず、エンゲルスの初期の思想的核心を探りあてようとする数編の労作から紹介してゆこう。

まず紹介しなければならないものに、広松渉の「初期エンゲルスの思想形成」¹⁾がある。これは、わが国のみならず外国にも先がけて、初期マルクス主義思想の形成にとって、エンゲルスの果たした独自の役割を高く評価し、「共産主義理論と唯物史観とのいずれの方面においても、エンゲルスの方が先行し、かつ主導したということわれわれは認めなければならないように思う。」（16ページ）という提言を行なった重要な論文であった。さらに、広松にはこうした問題意識に立脚した『ドイツ・イデオロギー』編集に関する一連の論文がある。また広松にはわが国で最初の、エンゲルスを独自の対象にした研究書『エンゲルス論—その思想形成過程—』²⁾がある。本書は「従来の研究者たちは、マルクスとエンゲルスとを一体に扱うの余り、エンゲルスの独創性を看過してはいないか。従ってまた、マルクス主義の成立に際してエンゲルスの果たした役割の過少評価に陥ってはいないか。……二つの独創的な知性が全く同じ音色を奏するということはおよそありえないことであって、多分に発想を異にする両人の所説を無雑作に混淆するところから無用の錯綜を招来しているのではないか。現に『自己疎外論』の処理、『歴史法則と諸個人の自由』、『資本論の弁証法と自然弁証法』等々、解釈上異説を生じている一連の諸問題は、両音素の解析をぬきにしては解きたい迷を残すかに思われる。」（2～3ページ）との立場から、特に「ヘーゲル左派の主流でさえまだ体制内在的であった時期に、弱冠20才前後の彼が一体いかにして反体制運動の旗手となりえたのか、その後いかにして彼がヘーゲル左派運動に参加しえたのか、また、マルクスですら共産主義に対して批判的な態度をとっていた時点で、彼が一步先に共産主義者となり、いちはやく理論的、実践的運動を開始することができたのは何故か」（1ページ）といった問題を中心に論議が進められていく。

以上のような広松の論理展開と対応する論文としては、花崎皋平の「唯物論的歴史観の全体的構想について」³⁾、望月清司『「ドイツ・イデオロギー」における『分業』の論理』⁴⁾などがある。次に、以上のような視点ではないけれども、マルクス主義思想の形成過程においてエンゲルスの貢献を重視しているものに、ローゼンベルグ『初期マルクス経済学説の形成』⁵⁾と、テ・イ・オイゼルマン『マルクス主義哲学の形成』⁶⁾がある。収録されているエンゲル

ス関係のものを紹介しておこう。『初期マルクス経済学説の形成』—第1章3「フリードリヒ・エンゲルスの初期の労作」、第2章「フリードリヒ・エンゲルスの初期の経済学的研究」、第6章3「ドイツにおけるエンゲルスの共産主義宣伝の特徴」、第7章「『イギリスにおける労働者階級の状態』」。『マルクス主義哲学の形成』—第1部第1章第8節「エンゲルスの無神論の立場への移りゆき。革命的民主主義の見解の生成」、第9節「エンゲルスの青年ヘーゲル主義の立場への移行。ヘーゲル哲学の革命的=民主主義的解釈」、第10節「エンゲルスのシェリング非合理主義にたいする闘い。ヘーゲル、青年ヘーゲル派、およびフォイエルバッハへの態度」、第2章第4節「エンゲルスの《青年ドイツ》との分離、青年ヘーゲル派との隔りの端緒」、第3章第2節「エンゲルスと、フランスおよびイギリスにおける空想的社会主義学説。共産主義への移行」、第5節「《独仏年誌》におけるエンゲルスの諸論文、ブルジョア経済学およびT・カーライルの反動的ロマン主義的社会学」、第10節「F・エンゲルスの共産主義の見解。ブルジョア民主主義および自由主義者のニセ社会主義的声明の批判」、第2部第1章第5節「エンゲルスの著書《イギリスにおける労働者階級の状態》」、第2章第4節「《共産主義者同盟》の結成。F・エンゲルスの労作《共産主義の原理》」。

他に、「エンゲルスの初期の著作、主として、『国民経済学批判大綱』（『独仏年誌』1844年）および『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）を中心にして、唯物史観形成期の理論と実証の関係を明らかに」（41ページ）しようとした佐藤博の「初期エンゲルスにおける理論と実証」⁷⁾があることを付け加えておこう。

- 1—5) ローゼンベルグ・副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』（大月書店、昭和32年5月、D:И. Розенберг; Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века, Москва, 1954)
- 2—6) テ・イ・オイゼルマン・森宏一訳『マルクス主義哲学の形成』第1部、第2部（勁草書房、昭和39年6月、40年4月。Т. И. Ойзерман, Формирование Философии Марксизма, Москва, 1962)
- 3— 広松涉『『ドイツ・イデオロギー』編輯の問題点』（季刊『唯物論研究』21号、昭和40年4月）
- 4—3) 花崎皋平「唯物論的歴史観の全体的構想について—『ドイツ・イデオロギー』第1章新版から—」（『思想』、昭和41年7月号）。これは同『マルクスにおける科学と哲学』（盛田書店、昭和44年11月）第1章第1節に収められている。
- 5—1) 広松涉「初期エンゲルスの思想形成」（『思想』、昭和41年9月号）
- 6— 同 『『ドイツ・イデオロギー』新版のために』（『名古屋工業大学学報』、昭和41年12月）
- 7— 佐藤博「初期エンゲルスにおける理論と実証」（『専修経済学論集』4号、昭和42年3月）
- 8— 広松涉『『ドイツ・イデオロギー』の編輯について—東ドイツ新版の出現を機に—』（『思想』、昭和42年6月号）
- 9— 同 『マルクス主義の成立過程』（至誠堂、昭和43年6月）。なおこの著書は先の三つの論文—「『ドイツ・イデオロギー』新版のために」は未収録—を収録しているが、他にも、「いわゆる“口述筆記説”に寄せて」が「初期エンゲルスの思想形成」の補題として書かれたり、「エンゲルスの再評価のために」（『世界の大思想』河出書房、第5巻『エンゲルス』の月報、昭和42年8月）や、「『ドイツ・イデオロギー』ソ連新版について」（『図書新聞』851号、昭和41年3月26日）、「『ドイツ・イデオロギー』新版が投じた東ドイツ哲学会の新しい波紋」（『日本読書新聞』1396号、昭和42年2月27日）などが新たに収録されている。
- 10—2) 同 『エンゲルス論—その思想形成過程—』（盛田書店、昭和43年10月）

- 11—4) 望月清司『『ドイツ・イデオロギー』における『分業』の論理』(『思想』, 昭和43年12月)
- 12— 慶応大学経済学部内解放ゼミナール準備会「F・エンゲルス, K・マルクス著・広松渉編輯案『ドイツ・イデオロギー』」(昭和44年12月)。なお, 本稿の「あとがき」には坂間真人による簡単な文献紹介—①『『ド・イデア』の内容を再検討し始めた文献』, ②「エンゲルスとマルクスの発想の差異を検討し始めた文献』, ③「エンゲルスを再検討し始めた文献・資料」—がついている。
- 13— 水田洋「創始者たち」(『講座マルクス主義3—マルクス主義思想史—』「序章」, 日本評論社, 昭和45年1月)
- 14— 細見英「『経哲草稿』第1草稿の執筆順序—N. I. ラーピン論文の紹介—」(『立命館経済学』第19巻3号, 昭和45年8月)

(2) 後期エンゲルス

後期エンゲルスに関するものとしては, まず平田清明「晩年のエンゲルス—マルクス主義研究序説—」¹⁾がある。これは, 「今日, マルクス主義が, 生きた思想として, 世界史の現段階にふさわしい自己展開を成就するためには, マルクス=エンゲルスの思想そのものが, この二人の全生涯にわたって, 再検討されなければならないのであり, そしてその場合には, 晩年のエンゲルスが後代に残した問題をさけるわけにはいかないように思う。」(114ページ)との視点に立って, 「一」はしがき, 「二」資本主義の変貌, 「三」ヨーロッパ大戦とロシア革命, 「四」解放運動の形態転換, の問題について論じたものである。

次に, 杉原四郎の「晩年のエンゲルスの諸業績」²⁾がある。これは, エンゲルスが「研究と著述のための時間とエネルギーの多くを, 実践面での活動に割かねばならなかったうえ, 残されたものの大部分をマルクスの遺業の達成にささげたために, 自分自身の生来の仕事, たとえば1873年以来手がけてきた自然弁証法の研究や, 農民戦争を軸とする全ドイツ史の再検討などは, 結局みずから手で完成することはできず, 未完の草稿や, 部分的に公表された諸論文をのこしたままで, その生を終える結果となった」(222ページ)ことなどを述べた「I・マルクス死後のエンゲルスの重責」。さらに, エンゲルスが『資本論』第3部第5篇第30章の中ででてくる産業循環論に補註をつけ, 資本主義の『無計画性』の集中的表現である周期的恐慌が『資本論』の草稿の書かれた後にその形態を変化させたことを指摘し(2225ページ)たことや, こうした「変化の原因と意義について」(同)エンゲルスが述べたことを紹介した「2, 独占資本主義段階の諸現象の研究」。そして最後に, 「株式会社形態の一般化, 『株式会社を2乗, 3乗したものをあらわす新たな産業経営形態の発展』(『資本論』Ⅲ, 478頁)およびこれらにとまなう取引所の機能の高度化について, エンゲルスが特別の注目をはらっていた」(229ページ)ことを紹介した「3, 株式会社・証券取引所に関する問題意識」とから成っている。

また, 晩年のエンゲルスと帝国主義論との関連をさぐった降旗節雄「エンゲルスと帝国主義」³⁾がある。これは「73年恐慌以後の……新たな歴史的環境のもとに, マルクス主義運動の『^{ゲネラル}将軍』として, つぎつぎに生起する実践上の諸問題に理論的照明をあてつづけた一連のエンゲルスの発言は, ……マルクス主義における理論と歴史と政策との関連を理解するうえで深い示唆を与える内容をもつ, ……そして, また, 当時のエンゲルスの発言の検討は, 90年代以降のいわゆる『修正主義論争』として展開されるマルクス主義理論の変貌の主要方向を, それが既に萌芽的ではあれ準備していた」(86ページ)との前提に立って, 「特に関税政策, 農業問題, 独占, 株式会社, 戦争などについての彼の所説をとりあげ, 最後に資本主義の歴史的発展と80年代以降の特殊な社会・経済情勢の展開との関連についての彼の見解を総括的に検討しつつ, 帝国主義論形成期における主要な理論的諸潮流とエンゲルスとの系譜的脈絡関係のいとぐちを探」(同)っている。

最後に、マルクスを俗流化したのはほかならぬ後期のエンゲルスであるとする黒田寛一の『資本論以後百年』⁴⁾のあることをつけ加えておこう。

- 1—1) 平田清明「晩年のエンゲルス—マルクス主義研究序説—」(『経済科学』IX—3, 名古屋大学, 昭和37年)
- 2—2) 杉原四郎「晩年のエンゲルスの諸業績」(同『マルクス経済学の形成』第12章, 未来社, 昭和39年4月)
- 3—4) 黒田寛一『資本論以後百年』(こぶし書房, 昭和42年11月) —なお本書は(6)「経済学一般」のところで主としてとりあげる。
- 4—3) 降旗節雄「エンゲルスと帝国主義」(『思想』, 昭和44年9月号)
- 5— 広松渉「老エンゲルスの遺した問題」(同『現代革命論への模索—新左翼革命論の構築のために—』「第1部第2章第1節」, 昭和45年4月)

(3) 弁証法的唯物論

エンゲルスとの関連で弁証法的唯物論の問題をとりあげたものには、戦後まもない時期に書かれた、まつむら・かずとの「弁証法的唯物論」¹⁾や、秋沢修二「唯物弁証法の根本的性格」²⁾などがあるが、ここでは最近のものとして、三浦つとむ『レーニンから疑え』³⁾に収録されている論稿を紹介しよう。三浦は、第1部のなかの「レーニンから疑え」(これはもと『現代の眼』, 昭和38年10月号に掲載されたものに若干加筆したものである)の3「エンゲルスの真理論のレーニンによる修正」で、エンゲルスが『反デューリング論』の中で述べている有名な命題、すなわち「真理は誤謬となり、誤謬は真理となる」、「無条件的要求を持つ認識は、相対的誤謬の系列を通じて実現される。」に関連して次のように述べている。「エンゲルスが絶対的とか相対的とかいうのは真理と誤謬の対立についてであり、両者の関係についてであって、それ以外の意味ではない。相対的真理というのは、誤謬との対立が相対的であるような真理、つまり認識の中にわずかではあるが誤謬が入りこんでいてもはや絶対に真理であるとはいえないような真理をさしている。」(29~30ページ)つまり、「エンゲルスは絶対的とか相対的とかいうことばを、認識相互の対立に使ったのに、レーニンは対象と認識との対立にスリ変えてしまったのである。そこでここからくる結論は、部分的に不完全に反映したものがつぎつぎにつみ重ってすっかり反映するようになるという考え方であり、『相対的真理の総和から組成される絶対的真理』というレーニンの規定である。……したがってレーニンの『総和』規定を受け入れると、否応なしにマルクス主義でいうところの相対的真理を誤謬を伴わない真理にしてしまい、マルクス主義の意味での絶体的真理と同一視してしまう結果になる。」(31~32ページ)他に本書では、第3部の初め「弁証法とは何か」(これは『現代思想』, 昭和36年6月号に掲載したもの)の1「エンゲルスの2種類の規定」がある。

- 1—1) まつむら・かずと「弁証法的唯物論」(『哲学評論』Vol. 1, No. 1, 民友社, 昭和21年10月)
- 2—2) 秋沢修二「唯物弁証法の根本的性格」(『哲学評論』Vol. II, No. VI, 昭和22年10月)
- 3— 原 光雄「否定の否定の法則」(『理論』, 昭和23年1月)
- 4— ボ・ゲドロフ「否定の否定の法則」(『国際資料』No. 37, 昭和32年5月)
- 5—3) 三浦つとむ『レーニンから疑え』(芳賀書房, 昭和45年2月)

(4) 自然弁証法

エンゲルスの自然弁証法を中心に論じたものとしては、まず「諸雑誌」に発表した諸論文に少し訂正補筆して

集録した」(「まえがき」) 田辺振太郎の『自然弁証法研究』¹⁾がある。これは、「諸論」, 1「エンゲルスの遺稿『自然弁証法』の構成について—エンゲルスの遺稿に関するデー・リヤザノフの所見に対して—」, 2「自然弁証法雑考 A. エンゲルス以後の自然弁証法, B. C.」, 3「『過渡期』なるカテゴリーの特質について」, 4「自然弁証法の見地からみた運動形態の固有の序列と自然科学各分科の特性並に方法についての2, 3の観察」, 5「運動形態の分類補論—原光雄氏の批判に答う—」, 6「認識に対する実践の優位の1つの意味について」, 7「自然弁証法と史的唯物論といわゆる上下関係—原光雄氏の討論について—」, 8「個の主体性と自覚の論理—梅本克己氏の問題提起に対して—」とから成っている。また「附録」の2には「エンゲルスの遺稿『自然弁証法』の版本について」がついていて貴重である。

他に20年代の研究には、原光雄の『自然弁証法の研究』²⁾などがあるが、ここでは30年代以降の研究で注目される山口裕一「エンゲルスの復権—サルトル批判を軸にしたスターリン主義批判—」³⁾を紹介しよう。山口は、「エンゲルスに『マルクス主義の貧血症』化の責任を求める論者は枚挙にいとまがない」(64ページ)現状に対して、「マルクス主義は、何よりも先ず革命の哲学でなければならない」(同)との観点に立って、エンゲルス「自然の弁証法」の「その弁護を、何よりもまず、サルトルの解釈による『自然の弁証法』を矮少化、卑俗化に対する批判として行」(同)い、そして「その批判は同時に、サルトルをはじめ多くの知識人にそうした卑俗化を許さねばならなかったマルクス主義者の側にも向け」(同)ていく。「そうした作業を通じてこそ、はじめてスターリン主義なるものの本質を暴くことが出来る」(同)とする。そして最後に次のように結んでいる。「マルクス主義がその有効性を回復するのは、サルトルの言うように、『自足している人間的弁証法』、エンゲルスの自然弁証法におきかえることによってなされ得るものではないことは、これまでの結論として明らかである。……サルトルが『人間』を主張するとき、マルクス主義もまた人間をもって応じなければならないかもしれない。しかし、サルトルが提示する絶対的な主観としての人間と、それを類的存在として規定するマルクス人間とは、その自然観が異なる以上同じではあり得ないのだ。その差異を明確に論じることなく、ただ人間をもち出すべきだという主張には、危険な畏がひそんでいる。……要は、マルクス主義的自然観、世界観にもとづいた変革の論理を、実践的な立場でその有効性を立証し得る強固さをもって、確立することにある。」(74~75ページ)

1—2) 原光雄『自然弁証法の研究』(大雅堂, 昭和21年12月)

2— 同 「自然科学の分類—第3論—田辺振太郎の批判に答う—」, 2「エンゲルスの生命規定」(『理論』, 昭和24年4月号)

3—1) 田辺振太郎『自然弁証法研究』(日本評論社, 昭和24年9月)

4— 伊藤至郎「自然弁証法—エンゲルス『弁証法と自然』覚え書き—」(同『自然弁証法』所収, 古明地書店, 昭和24年9月)

5— 原光雄「エンゲルスの生命論」(『思想』, 昭和25年12月号)

6— サルトル, 竹内芳郎, 矢内原伊作訳「独断的弁証法と批判的弁証法」(同訳『サルトル全集』, 第26巻, 弁証法的理性批判, 第1巻, 実践的総体の理論』序論A, 人文書院, 昭和37年11月)

7—3) 山口裕一「エンゲルスの復権—サルトル批判を軸にしたスターリン主義批判—」(『情況』, 昭和43年12月)

8— 杉田元宣「エンゲルスと自然の弁証法」(『一橋論叢』61巻4号, 昭和44年4月)

9— 広松渉「マルクス主義の再検討—その2『自然弁証法』について—」(『京都大学新聞』1420号, 昭和44年5月)

(5) 史的唯物論

最近のものとしては大井正の『唯物史観の形成過程』¹⁾がある。本書は、第1篇「唯物史観における人間観の形成過程」、第2篇「ドイツ社会思想における疎外論の変遷」、第3篇「『経済学批判』と唯物史観」という構成になっているが、エンゲルスを特に対象にした節には次のものがある。第1篇では序論の中の「若いマルクスと若いエンゲルス」、第2章の中の「エンゲルスの人間主義プロレタリアートに対する歴史的分析」、第3篇第2章の「『大綱』における私的所有批判」、第6章「『大綱』における労働」。

次に、日下藤吾の「エンゲルスにおける唯物史観の新解釈」²⁾（同「唯物史観の再吟味」(4), (5)）がある。本稿は、エンゲルスが晩年（特に、K・シュミットへ）の手紙のなかでなした「唯物史観に対する『修正』は、エンゲルス自身の叙述するところに従えば、唯物史観に関する俗流的解釈の誤りを指摘して、正しい解釈を提示するという意図の下になされていることになっているが、実質的には、……それは唯物史観の批判的修正或は放棄と見た方が適切である。」(4)の97ページ)と述べ、全体として、マルクス主義を排撃せんとしたものであるが、一読の要がある。他に、20年代の論稿として、弁証法的唯物論との関連でエンゲルスの唯物史観を問題にした森信成の「弁証法的唯物論と史的唯物論についての一考察」³⁾、また自然弁証法との関連で述べた原光雄の「自然弁証法と史的唯物論」⁴⁾などがある。

またエンゲルスの家族論については多くの論争があるが、最近、その一連の論争を整理しながら、「家族を全体社会との関連において科学的に把握」（「まえがき」）しようとする戸谷修の『家族の構造と機能』⁵⁾を紹介しておこう。戸谷はまず、エンゲルスの家族論を中心に論議が展開されている第1章「社会発展の原動力と家族集団の役割」では、「家族が史的唯物論においてどのように位置づけられているかを明らかにし……、家族起源論の最大の古典といわれるエンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』に示されている命題をめぐる諸論争に焦点をあわせ、家族が人間社会の存続にとって欠くことのできない労働力の再生産を担ってきた社会的意義を明らかにしようとし」（同）、次に第2章「家族学説史」の第1節「モーガン＝エンゲルスにおける家族発展説」、第2節「モーガンに対する批判説とその問題点」では、「モーガン・エンゲルスの家族学説を整理することによって、家族の発展形態がそれぞれの時代の生産力に依拠すると考えた史的唯物論の基本的な分析視点を確認し」（同）ている。

最後に、唯物史観の立場から、エンゲルスの教育思想をとりあげた大橋精夫「マルクスおよびエンゲルスの教育思想—史的唯物論と教育—」⁶⁾のあることをつけ加えておく。

1—4) 原光雄「自然弁証法と史的唯物論」（『前衛』21, 昭和22年11月）

2— 熊谷開作「モーガンとエンゲルス—法存立基礎たる社会の成立について—」（『同志社論叢』90号, 同志社大学法学会, 昭和23年3月）

3—3) 森信成「弁証法的唯物論と史的唯物論についての一考察」（『唯物論研究』6, 昭和24年9月）

4— 原光雄「自然弁証法と史的唯物論の成立関係—田辺振太郎・田中吉六氏への批判と反批判—」（『思想』, 昭和25年1月号）

5— 山室周平「家族学説史の前史的吟味—エンゲルスによる1861年起点説の吟味を中心にして—」（『社会学評論』2巻2号, 昭和26年）

6— 玉城 肇「家族研究史におけるL・Hモーガンの意義」（『愛知大学法経論集』第6集, 昭和28年）

7— 柳春生「エンゲルス『起源』における家族および国家の問題について」（『法政研究』22巻2～4号合併）

- 号, 昭和 30 年)
- 8— 平井潔「マルクス主義よりみた性と家族」(『思想』, 昭和 31 年 10 月号)
- 9—6) 大橋精夫「マルクスおよびエンゲルスの教育思想—史的唯物論と教育—」(『名古屋大学教養部紀要』第 1 輯, 昭和 32 年 3 月)
- 10— 青山道夫「家族学説の諸問題」(『家族』講座, 『家族問題と家族を』I, 酒井書店, 昭和 32 年)
- 11— 江守五夫「法民族学の基本的課題」(『今日の法と法学』所収, 勁草書房, 昭和 34 年)
- 12— 田中吉六「史的唯物論のエレメントと二種類の生産」(『思想』, 昭和 35 年 4 月号)
- 13— 王城肇「家族集団と社会発展の関係」(『法律時報』, 昭和 35 年 10 月号)
- 14— 同 「家族と社会発展の関係」(『法経論集』34 号, 昭和 36 年)
- 15—2) 日下藤吾「エンゲルスにおける唯物史観の新解釈」(同「唯物史観の再吟味」(4), (5), 『青山経済論集』12 巻 4 号, 13 巻 1 号, 昭和 36 年 3 月)
- 16— 青山道夫「唯物史観と家族理論—玉城教授の批判に答えて—」(『法政研究』第 28 巻 1 号, 昭和 36 年)
- 17— 井藤半弥「唯物史観の上部構造—エンゲルス 3 書簡の回顧—」(『愛知学院大学商学研究』13 巻 3 号, 昭和 37 年)
- 18— 江守五夫「家族史研究と唯物史観—青山・玉城論争を中心として—」(内田, 渡辺共編『市民社会と私法』, 東大出版会, 昭和 38 年)
- 19— 内田穰吉「社会発展と否定の否定の法則」(『富大経済論集』6 巻 3, 4 合併号, 昭和 38 年)
- 20— 布村一夫「モルガン・ファインス・エンゲルス—『家族の起源』第 1 版, 第 4 版によせて—」(『歴史学研究』314 号, 昭和 41 年)
- 21— 玉城肇「唯物史観と家族集団—江守教授らへの反批判を通じて家族研究の基本原則についての試論—」(『松山商大論集』17 巻 6 号, 昭和 41 年)
- 22—1) 大井正『唯物史観の形成過程』(未来社, 昭和 43 年 4 月)
- 23— 青山道夫「エンゲルス『起源』の命題と唯物史観—再び玉城教授の批判に答える—」(『法学論集』1 巻 1 号, 西南学院大学, 昭和 43 年)
- 24— ルイ・アルチュセール, 河野健二, 田村淑次「補遺」(同『甦るマルクス』所収, 人文書院, 昭和 43 年 10 月)。この「補遺」はエンゲルスに関連して上部構造と下部構造の問題に言及している。
- 25— 田中吉六「史的唯物論と『生活の生産』」(『情況』, 昭和 44 年 3 月号)
- 26— 同 「2 種類の生産と唯物史観」(『思想』, 昭和 44 年 8 月号)
- 27—5) 戸谷修『家族の構造と機能』(風媒社, 昭和 45 年 6 月)

(6) 経済学一般

まず, エンゲルスの『国民経済学批判大綱』を中心に論じたものに, 杉原四郎「マルクス経済学形成の一礎石—エンゲルス『経済学批判大綱』研究序論—」¹⁾, および「『経済学批判大綱』再論—エンゲルス歿後 60 年によせて」²⁾がある。これは, 「『資本論』体系に結実するマルクス経済学の発端は, この『経済学批判大綱』にある」(『ミルとマルクス』6 ページ) という立場から次のように述べている。

「私有財産にもとづく競争の不道徳性ないし非人間性を『人類にふさわしい状態のもとで』の『真の競争』と対比することによって浮彫し, これをはげしく攻撃」(36 ページ) し, 「競争の発展を歴史的必然的なものとして

把握し、競争の法則を客観的自然的なものとして理解し、競争の意義を生産力とかかわらしめて評価している」(37ページ) エンゲルスの「競争論が、一方では、初期社会主義に一般にみられる空想的観念的性格をすくなくならず共有していると同時に、他方では、それを克服した科学的唯物論的思考をすでにある程度まで確立していることを知りうるのであって、『大綱』の基本的観点がこのようなものであればこそ、またそのかぎりでは、『大綱』は、社会主義的立場からするはじめての包括的な経済批判に成功したものであり、『経済学・哲学手稿』をよびおこす1つの強力な契機たりえた。」(38ページ)とし、そうした視点からエンゲルス『大綱』の「価値論」、「恐慌論」、「人口論」を分析している。

他に『大綱』をとりあつかったものとして主なものには、佐藤金三郎「競争と過剰人口—エンゲルス『国民経済学批判大綱』を中心として—」³⁾がある。これは、杉原前掲論文の主張する「『大綱』の過剰人口論と後年のマルクスの『資本論』のそれとの連続性」(佐藤論文2ページ)と、時永淑「マルクスにおける『相対的過剰人口論』の成立にかんする一考察」⁴⁾のもつ「両者のあいだの断絶性を強調する点」(同)のそれぞれの「一面的な弱み」(同)を克服しようとするものだが、この点について佐藤は「初期エンゲルスの過剰人口論は『資本一般』の見地の欠如した、いかえれば生産構造論なき競争論、景気の失業論であった。」(31ページ)とする。

次に『資本論』関係としては、イ・ゲ・カズイミナ、豊川卓二訳「エンゲルスの『資本論』第3巻刊行準備作業について」⁵⁾、や副島種典「マルクス『資本論』第2巻について—その完成のためのエンゲルスの働きにかんするハルトノフの研究」⁶⁾などがあるが、最近、佐藤金三郎のこの問題に関する注目すべき一連の論文が発表されている。また黒田寛一は『資本論以後百年—エンゲルスによるマルクスの歪曲に抗して—』⁷⁾なる著書をあらわしているが、本書はⅠ「『資本論』と現代」、Ⅱ「戦後日本のマルクス主義経済学」、Ⅲ「商品論のスターリン主義的解釈」、Ⅳ「エンゲルスによるマルクス経済学の俗流化」、Ⅴ「資本制生産の本質的矛盾と『資本論』とから成って、中でもⅣとⅤにおいて、「唯物史観」、「社会経済史」、「商品経済史観」、「直接生産過程論」、「恐慌論」、「基本矛盾論」などについて、いかにエンゲルスがマルクスを歪めたかを述べているのだが、編集後記によると、「……重点は、マルクス経済学のエンゲルスの理解の検討というところにおかれて」おり、「検討の素材はエンゲルス『空想より科学へ』第3節である。ことさらにエンゲルス経済学がここでとりあげられた現実的意義ということについては、……今われわれがマルクス経済学の俗流化・スターリン主義的歪曲を根本的に克服してゆこうとする場合に、エンゲルス経済学を批判的に検討することが捷徑であり、また不可欠のものであるということである。……エンゲルスがスターリン主義経済学者たちのマルクス歪曲の先視的役割をはたしているかぎりにおいて、彼の問題性を厳しく検討しなければならない」(309~310ページ)という。

- 1— 山田勝次郎「マルクス・エンゲルスの経済理論(上)」(『潮流講座、経済学全集第1部』, 潮流社, 昭和24年2月)
- 2— 鈴木鴻一郎「マルクス・エンゲルスは修正されるべきか—コズロフ『レーニンおよびスターリンは社会主義経済学の創始者である』について—」(『評論』, 河出書房, 昭和24年3月号)
- 3— 平館利雄「マルクス・エンゲルスは如何に発展すべきか—〈社会主義の価値法則について、鈴木鴻一郎氏の所説批判〉—」(『評論』, 昭和24年6月号)
- 4—6) 副島種典「マルクス『資本論』第2巻について—その完成のためのエンゲルスの働きにかんするハルトノフの研究」(『経済評論』, 昭和27年4月号)
- 5—1) 杉原四郎「マルクス経済学形成の一礎石—エンゲルス『経済学批判大綱』研究序論—」(『経済論集』 4

巻7, 8合併号, 関西大学, 昭和30年2月)

- 6—2) 同 『『経済学批判大綱』再論—エンゲルス歿後60年によせて—』(『同』5巻6号, 昭和30年9月)
 なお, 杉原の上記2論文は同『ミルとマルクス』第1部, 第1章「マルクス経済学の発端」(ミネルヴァ書房, 昭和32年2月, 42年5月増訂版)に収録された。
- 7— 吉田忠雄「マルクスとエンゲルスの人口問題について」(『政経論叢』24巻6号, 明治大学政治経済研究所, 昭和31年7月)。これは同『社会主義と人口問題』第2篇, 第5章「マルクスとエンゲルスの人口論」(社会思想研究会出版部, 昭和34年11月)に収録。
- 8— 三宅義夫「1870年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス・エンゲルスの見解」(『立教経済学研究』10巻2号, 昭和31年11月)
- 9— 同 「同(二)」(『同』10巻3号, 昭和32年2月)
- 10— 同 「1857年恐慌」(『同』11巻1号, 昭和32年6月)
- 11—4) 時永淑「マルクスにおける『相対的過剰人口』論の成立にかんする一考察」(『経済志林』25巻1号, 昭和32年)
- 12— 同 「同(続)」(『同』25巻3号, 昭和32年)
- 13— 佐藤金三郎「産業予備軍の形成」(『経済学雑誌』41巻1号, 大阪市立大学経済学部, 昭和34年7月)
- 14— 松田弘三「エンゲルス『国民経済学批判大綱』における価値論—労働価値論の否定と生産費と効用との関係としての価値概念—」(同『科学的経済学の成立過程—価値—剰余価値論と再生産—恐慌論史序説—』第3編, 第8章2, 有斐閣, 昭和34年10月)
- 15—3) 佐藤金三郎「競争と過剰人口—エンゲルス『国民経済学批判大綱』を中心として—」(『経済学雑誌』42巻6号, 昭和35年)
- 16— 木下悦二「貿易問題におけるマルクス・エンゲルス」(『経済学雑誌』44巻6号, 昭和36年6月)。これは同『資本主義と外国貿易』第1編, 第1章(有斐閣, 昭和38年1月)に収められている。
- 17— 飯田収治「史料紹介・マルクス・エンゲルスと社会主義者」(『西洋史学』LXII, (XVI—2), 昭和39年)
- 18—5) イ・ゲ・カズイミナ, 豊川卓二訳「エンゲルスの『資本論』第3巻刊行準備作業について」(『社会科学』No. 13, 静岡大学文理学部, 昭和40年7月)
- 19— 矢口孝次郎「産業革命論の源流—特にエンゲルスの見解について—」(『経済論集』16巻4, 5合併号, 関西大学, 昭和41年12月)。なおこれは同『産業革命研究序説』(ミネルヴァ書房, 昭和42年)に収録された。
- 20— 広西元信「エンゲルスは間違っている」(同『資本論の誤訳』所収, 青友社, 昭和41年12月)
- 21— 岡 稔「労働に応じた分配とブルジョアの権利—マルクス・エンゲルス・レーニンの社会主義観—」(『思想』No. 515, 昭和42年5月)
- 22— 岡崎栄松「初期マルクスの経済理論について—『経済学=哲学手稿』を中心として—」(『立命館経済学』16巻3, 4合併号, 『資本論』100年記念特集号, 昭和42年10月)。本稿のIIで「エンゲルス『国民経済学批判大綱』」が論じられている。
- 23—7) 黒田寛一「資本論以後百年—エンゲルスによるマルクスの歪曲に抗して—」(こぶし書房, 昭和42年11月)
- 24— 公文道明「『国民経済学批判大綱』について—マルクス経済学の形成(1)—」(『経済論集』6号, 新潟大学, 昭和44年)

- 25— 三浦つとむ『『資本論』とエンゲルスの手紙のアルチュセールの解釈』（同『マルクス主義の復原』第2章4, 勁草書房, 昭和44年6月）
- 26— 佐藤金三郎「アムステルダム・社会史国際研究所蔵『資本論』関係資料について」（『経済学雑誌』63巻2号, 昭和45年8月）
- 27— 同 「アムステルダムだより—I.I.S.G. とマルクス・エンゲルス遺稿をめぐって—」（『思想』, 昭和45年10月号）
- 28— 同 「アムステルダム I.I.S.G. 訪問—エンゲルス版『資本論』草稿をめぐって—（上）,（下）」（『日本読書新聞』1568号, 1569号, 昭和45年10月26日, 11月2日）
- 29— 公文道明『『国民経済学批判大綱』の意義』（武田隆夫他2名編『資本論』と帝国主義論—鈴木鴻一郎教授還暦記念—』上, 所収, 東大出版会, 昭和45年11月）
- 30— 佐藤金三郎『『資本論』の成立過程をめぐって—マルクス・レーニン主義研究所（モスクワ）を訪ねる—』（『世界経済評論』14巻11号, 昭和45年12月）

(7) 農業・地代論

まず、小川浩八郎の『『国民経済学批判大綱』におけるエンゲルスの地代論』¹⁾をとりあげよう。小川によると、エンゲルスの地代論の意義は次のようなものであると言う。「エンゲルスは……、地代定義にあたって、地所相互間の自然的諸条件の相違を前提として承認したうえで、土地生産の自然的基礎ならびにそのうえに加えられる人間労働とを地代形成のいわば生産力要因として把握し、それを『土地の収穫能力』（＝自然的側面）と規定していた。そして右のいわば生産力要因を生産関係としての人間的側面にかかわらしめ、結局、地代を『土地の収穫能力』と『競争』との関係であると定義していた」（148ページ）。そして、「社会が『生産について決定をくだす』にあたって、土地の生産能力は直接に生産費の一部に算入されると規定され、地代関係の消滅が展望される。農業生産力の高度の発展が地代の消滅と統一的に把握される。『人間が実らせることなしには死んだ不毛のものである土地』が私的所有の揚棄によって人間的活動に真実に合致するとき、地代として土地から分離せしめられていた『土地の価値』は土地そのものに復帰すると規定するエンゲルスの地代論の見地は、社会主義段階の農業生産様式についてのはじめの科学的展望として、その重要な意義があらためて確認されねばならないであろう。」（458～459ページ）

他に、地代論では、差額地代の問題をめぐって、マルクスとエンゲルスの見解の差異について論じられている一連の論争があるが、田代隆の詳しい論争整理「差額地代Ⅱをめぐる研究と論争」²⁾があるのでそれを参照していただくことにする。

次に、アジア的生産様式論をめぐって特にエンゲルスの見解を紹介しているものとしては、福富正実「マルクス・エンゲルスのアジア的生産様式論をめぐって—田昌五、クラピウエンスキー、コロストフツェフの見解の紹介—」³⁾その他がある。

- 1— 裕正夫「地代発生原因の発展(二)—差額地代第1形態から第2形態へ—」（『経済学雑誌』26巻6号, 昭和26年）
- 2— 河合悦三「大内力氏の農業理論—〈差額地代説〉を中心として—」（『思想』, 昭和28年4月号）
- 3— 大島清「わが国小作料は差額地代第2形態か」（『経済志林』23巻3号, 法政大学, 昭和30年）
- 4— 田代 隆「差額地代第2形態に対する疑問」（『農業経済研究』27巻2号, 昭和30年7月）

- 5— 日高 晋「差額地代第2形態論の問題点」(『経済志林』23巻4号, 昭和30年)
- 6— 同 「差額地代第2形態論の展開」(『同』24巻2号, 昭和31年)
- 7— 同 「最劣等地に生ずる差額地代について」(『同』24巻3号, 昭和31年7月)
- 8— 同 「差額地代第2形態論について」(『同』25巻1号, 昭和32年)。なお、以上の日高論文は同『地代論研究』(時潮社, 昭和37年10月)に収録された。
- 9— 山田勝次郎「差額地代の第2形態(差額地代Ⅱ)―農業における資本集積と差額地代増進との弁証法的展開の究明―」(同『地代論』第1論第4章, 岩波全書, 昭和32年5月)
- 10— 大内 力「差額地代第2形態について」, 「最劣等地の差額地代」(同『地代と土地所有』第3章, 第4章, 東京大学出版会, 昭和33年10月)
- 11— 常盤政治『農業における調整的生産価格の〈限界原理〉と〈平均原理〉―差額地代第2形態論の一考察』(『三田学会雑誌』52巻4号, 昭和34年4月)
- 12— 白川清『価値法則と地代』(昭和35年)
- 13— 原田純之介「マルクス・エンゲルスの農民観」(『経済論究』13号, 九州大学大学院, 昭和38年2月)
- 14— 井上周八「差額地代第2形態論における市場生産価格の形成原理について―第2形態論における『平均原理』と『限界原理』」(同『地代の論理』第1篇, 第5章, 昭和38年2月)
- 15—2) 田代隆「差額地代Ⅱをめぐる研究と論争」(遊部久蔵他5名編『資本論講座』6, 第1篇Ⅱ, 第2章「地代・収入」, 青木書店, 昭和39年7月)
- 16— H・B・テルーアコピアン, 福富正実訳「アジア的生産様式と農業共同体に関するマルクス・エンゲルスの見解」(『東亜経済研究』40巻1, 2号, 昭和41年8月)。なおこれは後に同編訳『アジア的生産様式論争の復活―世界史の基本的法則の再検討―』, 未来社, 昭和44年4月に収録された。
- 17— 原田 溥「マルクス・エンゲルスにおけるユンカー論」(『経済学研究』31巻3, 4合併号, 九州大学, 昭和42年3月)
- 18—3) 福富正実「マルクス・エンゲルスのアジア的生産様式論をめぐる―田昌五, クラピウエンスキー, コロストフツェフの見解の紹介―」(『山口経済学雑誌』18巻2号, 昭和42年7月)
- 19— 小川浩八郎「『国民経済学批判大綱』におけるエンゲルスの地代論」(『経済学論纂』9巻4号, 中央大学経済学研究会, 昭和43年7月)
- 20— フェレンツ・テーケイ, 本田喜代治訳「マルクスおよびエンゲルスの著作におけるアジア的生産様式」(本田編訳『アジア的生産様式の問題』所収, 岩波書店, 昭和44年9月)
- 21— 小林良正「ドイツ史に関するエンゲルスの諸文献」(同『アジア的生産様式研究』, 「A本論―古典研究―X」, 大月書店, 昭和43年3月)

(8) 労働問題

ここでは、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』を中心に論じているものから紹介しよう。まず「『状態』を社会主義文献として絶賛しながら、労働者調査の科学的文献としては十分に検討することなく、したがってまた、その意義と同時に限界を明らかにしていくような検討が欠けていたということが、実は、マルキシズムの流れの中でその後の労働調査自体の貧しさとつながっているように思われる。……もっぱらそのような角度からこの古典を回顧しようとした」(150ページ) 戸塚秀夫の「エンゲルス労働者調査の意義と限界―『イギリス

における労働者階級の状態』をめぐって—¹⁾がある。

また、『状態』それ自体をくわしく解説し、5回にわたって『月刊社会党』に連載した松尾均編の「エンゲルスの『労働者階級の状態論』(1)~(5)」²⁾がある。松尾は、なかでも(5)の三「『状態』の方法論上の問題点」で次のように述べている。「私はエンゲルスの『状態』の学問的意義は社会科学の一分科として、それも経済と政治の両分野を統一的にとらえる一科学における実証的科学あるいは現状分析の一つのモデルをわれわれに提供している。……またわれわれは、古くから存在する労働者階級に関する実証主義的な分析や、現象の単なる精密化をねらう社会学や、単に労働者階級の個々の側面の分析に止っている方法論をもたない労働者階級の一面的な分析等の非科学性を批判する基準を、そこから学びとることができる」(179ページ)。また、『状態』の限界については別の章で次のように述べている。「『大都市』→『競争』、『アイルランド人の移住』→『諸結果』という展開をとったことについては、妥当とみることはできない。……生活状態—労働市場—労働過程—への展開において、『諸結果』が不適当な位置にある……。これは競争論の過大評価と労働過程論の過少評価からきたエンゲルスの迷いである。もし、労働過程を労働者階級の経済的再生産過程の本質的側面として十分に評価し、生活状態—労働市場—労働過程への展開を正しい方向として徹底させるためには、『諸結果』は、生活状態の一部として位置づけるべきである。」(181ページ)

次に、エンゲルスの労働運動論をとりあげたものに富沢賢治「エンゲルスの19世紀末イギリス労働運動論」³⁾がある。これは、「『將軍』エンゲルスが、19世紀末の資本主義の変化をどう把握し、それに対応して階級闘争の戦略・戦術にどのような改変をもたらしたか、という問題について……; この問題をイギリス運動史にそくして、さらに詳細に掘下げて、考察」(19ページ)しているのだが、結論として富沢は次のように述べている。エンゲルスによれば「イギリス労働運動の脆弱性の真因は、イギリスの世界市場・植民地支配にあり、それ故また、イギリス労働運動の再生要因は、イギリスの世界市場・植民地支配の崩壊と労働者階級によるその自覚とにあった。」(35ページ)

1—2) 松尾均編「エンゲルスの『労働者階級の状態』論(1)~(5)」(『月刊社会党』No. 123, 124, 126, 127, 129号, 昭和42年~43年)。なおこの論文は主として村串仁三郎氏の執筆になるものである。

2— フォルスト・ウルリヒ、樺俊雄編訳「エンゲルス『イギリス労働者階級の状態』とマルクス主義社会学の基礎づけ」(樺俊雄編訳『史的唯物論と社会学』, —, „Historischer Materialismus und Sozialforschung, herausg. von Hermann Scheler, Berlin VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1966・所収, 法政大学出版局, 昭和43年1月)

3— 篠田基行「エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』における労働の健康状態について—体育思想史的研究—」(『淑徳大学研究紀要』第3号, 昭和44年3月)

4—1) 戸塚秀夫「エンゲルス労働者調査の意義と限界—『イギリスにおける労働者階級の状態』をめぐって—」(『経済評論』, 昭和43年4月号)

5— F・メーリング、足利末男他3名訳「エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』」(同『ドイツ社会民主主義史(上)』第1篇, 第13章, ミネルヴァ書房, 昭和43年6月)

6—3) 富沢賢治「エンゲルスの19世紀末イギリス労働運動論」(『一橋論叢』61巻1号, 昭和44年1月号)

(9) 国家・政治論

まず、エンゲルスの国家論については柴田高好「エンゲルスの国家論」¹⁾がある。柴田は、「マルクスの国家論

はマルクスの国家論であり、エンゲルスの国家論はエンゲルスの国家論である。だがマルクスの国家論はエンゲルスのそれなくしては、またエンゲルスの国家論はマルクスのそれなくしてはとても理解できない。その意味でわれわれは『マルクス・エンゲルスの国家論』について語る事ができる。両者の未分化的混同でもことさら区別だけでもなく、どこまでもその統一的把握と理解が問題なのである。」(52ページ)という視点のもとに、1「初期エンゲルスの国家論—1842年～1848年」(これは以前、『法経論集』No. 23, 静岡大学法経短期大学, 昭和39年に掲載されたもの)と、2「後期エンゲルスの国家論—1877年～1895年」の2期に分けて論じている。つまり柴田によると、「エンゲルスの国家論は階級国家論としてはマルクスより一足先んじ、マルクスが階級国家論に到達する露払いの役割を果たした。しかし、……エンゲルスの階級国家論はかならずしも特殊近代ブルジョア国家にのみ限られなかった。マルクスがどこまでも特殊近代国家の分析から国家の一般性へという方向をたどったとすれば、エンゲルスはむしろ平板な階級国家の一般論から近代国家にアプローチするという方法をとった」(73ページ)という。そしてそれは、「後期」に入りますます確立していったとする。しかし「後期」に入るとエンゲルスの国家論はむしろ、「階級国家論よりは分業国家論、そしてさらに、分業国家論から市民国家論へという傾向になが」(86ページ)ってゆく点のあることを指摘している。

次に、晩年のエンゲルスの革命戦術論をとりあげた浅井啓吾の「晩年のエンゲルスにみるドイツ革命の戦術論」²⁾がある。浅井はそこで次のように述べている。「ドイツ労働者党の創立以来、かれの最後に至るまで、エンゲルスの戦術論は一貫していた。普通選挙権と国民皆兵義務(または民兵制度)を、つまり、選挙における得票数の増大と軍隊内の社会主義化の進行を相互補足的なものとしてにらみあわせながら、ドイツ革命の展望を描き、当面の戦術をうち出していた点、この視点に変わりはなかった。」(53ページ)

また、「ロシア論」を論じたものには、荒武鉄郎の「マルクス・エンゲルスのナロードニキ観—19世紀70年代を中心に—」³⁾その他がある。荒武は、マルクス・エンゲルスが、特にエンゲルスが「70年代のロシア革命運動において、ナロードニキにいかなる役割を期待していたか」(40ページ)について、ザスリッチへの手紙などを引用しながら次のように述べている。「エンゲルスはまず、ナロードニキの主観的意図と、それがひきおこす人民反乱とを区別し」(同)ながら、「『人民の意志』派が政治闘争を当面の緊急の課題として提起したことは一步前進であった。しかし、ナロードニキ運動の伝統である人民の力を無視した点は一歩後退であった。1883年の『労働解放団』の建設にはじまったマルクス主義運動の展開は、これらの諸点の反省の上に立って、ロシア革命運動史に新局面を切りひらいていく。」(41ページ)

最後に、正田庄次郎の「議会制度とエンゲルス」⁴⁾を紹介しよう。これは、「エンゲルスが楽観的見通しのもとに、その議会制度観をたかめていった時に、産業資本主義段階から独占資本主義段階への転化が準備されつつあった。エンゲルスは、本来の基礎であるこのような経済状態の諸変化を当然無視せざるをえず、ここにかれの時代の制約性があった」(28ページ)のであり、「改良主義は、エンゲルスが考えたように、小ブルジョアより、単に、外から労働者階級にもちこまれるものではなく、労働者階級自身の中に、はっきりした経済的基礎をもって登場するに至った」(29ページ)とする。

1— 対馬忠行「1848年におけるマルクス・エンゲルス—特に綱領と戦略—」(『唯物史観』4, 昭和23年12月)

2— 林健太郎「三月革命と社会主義」(『西洋史学』XI, 昭和26年)

3— ポール・W・ブラックストック, 大場訳「マルクス・エンゲルスのロシア論」(『 Kommunismusの諸問題』Vol. 1, No. 2, 国際文化協会, 昭和28年6月)

- 4— スターリン，芝田進午訳「エンゲルス『ロシア・ツァーリズムの対外政策』について」（『理論』，民科，昭和29年10月号）
- 5— ブラトゥースイ，額田坦訳「民法理論にかんするエンゲルスの見解—『ソヴェト国家と法』誌，1948年第3号—」（山之内一郎監修『ソヴェト法学』第1巻4号，門脇書店，昭和30年11月）
- 6— 瀬原義生「ドイツ農民戦争の基本的性格（一），（二）」（『歴史評論』79～80号，民科，昭和31年9月～10月号）
- 7— 松尾均一「マルクス・エンゲルスの法思想—人道主義的側面と法思想の関連を中心として—」（『神戸法学雑誌』7巻，昭和32年7月）
- 8— 平沢三郎「マルクス・エンゲルスと民族問題」（『前衛』No. 134，昭和32年11月号）
- 9— 弥益祥純「帝国主義時代への過渡期について」（『宮崎大学学芸学部紀要Ⅱ，社会科学』8，昭和35年）
- 10—4）正田庄次郎「議会制度とエンゲルス」（『三田学会雑誌』53（8），昭和35年8月）
- 11— 小山治夫「エンゲルスの平和思想」（『思想』，昭和37年2月号）
- 12— 大隅逸郎「海波『社会主義の権威の問題』訳—エンゲルスの『権威論』を読んで—」（『同志社法学』71号，Vol. 14，No. 1，昭和37年5月）
- 13— 佐々木俊次「マルクス・エンゲルスとナロードニキ」（『研究年報』I，神戸外国語大学，昭和38年3月）
- 14—3）荒武鉄郎「マルクス・エンゲルスのナロードニキ観—19世紀70年代を中心に—」（『西洋史学』LX〔XV—4〕，昭和38年）
- 15— 飯田収治「マルクス・エンゲルスとドイツ社会主義者」（『西洋史学』LXII〔XVI—2〕昭和39年）
- 16—2）浅井啓吾「晩年のエンゲルスにみるドイツ革命の戦術論」（『経済系』第68集，関東学院大学経済学会，昭和41年3月）
- 17— 飯田 鼎「マルクス主義における革命と改良—第1 インターナショナルにおける階級・体制および民族の問題—」（御茶の水書房，昭和41年5月）
- 18— 津田道夫「エンゲルス『起源』の定式とレーニン」（同『国家論の復権—政治構造としてのスターリニズムの解明—』I「マルクス主義と国家の問題」の二，盛田書店，昭和42年10月）
- 19— M・M・スミールン，林基訳「『平民的反対派』形成とその歴史的役割—ドイツ農民戦争を中心に—」（『歴史評論』，昭和43年7月号）
- 20— 淡路憲治「1857年恐慌とマルクス・エンゲルス」（『法経学会雑誌』18巻3号，岡山大学，昭和44年2月）
- 21— 阪東宏「マルクス・エンゲルスとポーランド問題」（『歴史評論』，昭和45年5月号）
- 22—1）柴田高好「エンゲルスの国家論」（勝部元編『講座マルクス主義9，国家と革命』第1章「マルクス主義国家論の系譜」二，日本評論社，昭和45年6月）
- 23— 浅田喬二「マルクス・エンゲルスのロシア論」（『土地制度史学』48号，昭和45年7月）
- 24— 淡路憲治「晩年のエンゲルスのロシア像（一）」（『経済学会雑誌』2巻2号，昭和45年8月）
- 25— 下山三郎「国家論ノート」（『土地制度史学』49号，XIII—1，昭和45年10月）
- 26— 淡路憲治「晩年のエンゲルスのロシア像」（『思想』，昭和45年11月号）。なお上掲の淡路の諸論文はその後同『マルクスの後進国革命像』（未来社，昭和46年2月）に収められた。
- 27— 荒牧鉄郎「マルクス・エンゲルスの西部ロシア論」（『福井大学教育学部紀要』第20号，第Ⅲ部社会科

学, 昭和 45 年)

(10) 生誕150年記念文献

(a) 総記, (b) 初期エンゲルス, (c) 自然弁証法, (d) 家族論, (e) 民族問題, (f) 国家論, (g) 婦人論, (h) 芸術論, (i) 文化・語学論

(a) 総 記

- 1) 杉原四郎「ヘーゲル・エンゲルス・レーニン」(『甲南大学新聞』174号, 昭和45年9月20日) —これは、ヘーゲル生誕200年、エンゲルス生誕150年、レーニン生誕100年という年にちなんで、従来、マルクス主義研究の主流であったヘーゲル—マルクス—レーニンという系列を、ヘーゲル—エンゲルス—レーニンという「新しい視角から接近」することの重要性を説き、そのためにもエンゲルス研究が一層進展することを期待したもの。
- 2) 坂脇昭吉「戦前のわが国におけるエンゲルス研究文献について—エンゲルス生誕150年によせて—」(『千里山経済学』第4号, 関西大学大学院, 昭和45年10月) —本稿は、「戦前のわが国において、エンゲルスを独自の対象にした研究がどれほどあったのか、またエンゲルスはどのようなかたちで紹介されてきたのか、といったことをたどりながら、それぞれのテーマにそって主な論文をできるだけ紹介し」(38ページ) したものの。
- 3) 土屋保男「エンゲルス—その人と生涯—フリードリヒ・エンゲルス生誕150年—」(『前衛』, 昭和45年11月号) —本稿の目次を紹介しておこう。1. エンゲルスの人柄 (1) 革命運動こそ本領, (2) 謙虚, (3) 指導と援助, 2. エンゲルスの活動 (1) パリ時代のエンゲルス, (2) 1848~49年革命期, (3) 1850年~83年期 (イ) 理論的活動, (ロ) 階級闘争
- 4) ソ連マルクス・レーニン主義研究所「労働者階級の偉大な闘士であり、教師であったエンゲルス—エンゲルス生誕150周年記念—」(『月刊インターナショナル』No. 77, 刀江書院, 昭和45年11月号, ソ連共産党マルクス・レーニン主義研究所『新時代』23巻31号, 1970年10月7日号)
- 5) 森宏一「エンゲルス生誕150年—その生涯と活動のスケッチ—」(『月刊学習』, 昭和45年11月) —本稿で森は、エンゲルスがマルクス主義に如何なる点で寄与したかについて次のように語っている。「理論のうえからいうと、マルクスはマルクス主義経済学を確立しました。エンゲルスはこれにくらべると、弁証法のおよび史的唯物論についてこれらを明確にすることに大いに寄与しました。」(59ページ)
- 6) ウラジーミル・イリイチ・レーニン「フリードリヒ・エンゲルス」(U. I. Lenin, *Frederick Engels*, "Peace, Freedom and Socialism,, Vol. 13, September 1970, Number 9. "On The 150th Anniversary of the Birth of Frederick Engels,, 『平和と社会主義の諸問題』, 日本版訳, 日本共産党機関誌経営局, 昭和45年11月冬季号—エンゲルス生誕150年記念—) 本誌には他にも生誕を記念して論文が掲載されているので論題のみを下に記しておく。
- 7) ピエール・アンジェス「歴史と階級闘争」(P. HENTGES, "History and the Class Struggle,,)
- 8) ダスタボ・コルマン「エンゲルスと国際主義」(G. COLMAN, "Engels and Internationalism,,)
- 9) ハイマン・フェイガン「エンゲルスとイギリスの労働者階級」(H. FAGAN, "Engels and the British Working Class)
- 10) ダヴィド・エラザル「エンゲルスの農業理論とブルガリア共産党の歴史的経験」(D. ELAZAR, "Engels on the Agrarian Question and the Experienc of the Bulgarian Communist Party,,)
- 11) イエシ・ラディカ「エンゲルスの形而上学批判」(J. LADYKA, "Engels's Criticism of Metaphysics,,)
- 12) エルネスト・ラジョニエーリ「晩年のエンゲルスとマルクス主義の歴史性」(E. RAGIONIERI, "The Later Engels and the Historicism of Marixsm,,)
- 13) ベラ・ヴェッシ「国家についてのエンゲルスの学説」(B. VESZI, "Engels on the State,,)

- 14) ウイリ・ゲルンス「エンゲルスの遺産を守る思想闘争」(W. GERNS, "Ideological Battle over the Engels Legacy,,)
- 15) エルウイン・ツッカーニシリング「エンゲルスと共産主義運動の戦略」(E. ZUCKER-SCHILLING, "Engels and the Strategy of the Communist Movement,,)
- 16) アウグスティン・ヂャク「エンゲルスとルーマニアの労働運動」(A. DEAC, "Engels and the Labour Movement in Rumania,,)
- 17) イープ・ニョールント「組織者、指導者としての共産主義者の役割についてのエンゲルスの見解」(I. NORLUND, "Engels on the Unifying and Guiding Role of Communists,,)
- 18) ミハイル・ヨフチュク「エンゲルスと革命ロシア」(M. YOVCHUK, "Engels and Revolutionary Russia,,)
- 19) アフメド・カリム『「反デューリング論」—アラブ諸国のイデオロギー闘争にとっての意義と切実性』(A. KARIM, ,, "Anti-Dühring", Its Relevance to the Ideological Struggle" in Arab Countries,,)
- 20) アマト・ダンソコ「エンゲルスの空想的社会主義批判と熱帯アフリカの若干の『社会主義的』潮流」(A. DANSOKO, ,, "Socialist" Trends in Tropical Africa in the Light of Engels's Criticism of Utopian Socialism,,)
- 21) 高平次郎「エンゲルス生誕150年、科学的社会主義とエンゲルスの貢献」(『赤旗』, 昭和45年11月26日)
—これは、「マルクスの無二の同志」, 「エンゲルスが分担した仕事」, 「実践面での役割」, 「“エンゲルス攻撃”の誤り」という順序で語られている。
- 21) 服部文男「フリードリヒ・エンゲルス—その人がらとマルクスとの友情—」(『赤旗』, 昭和45年11月27日)
—これは、マルクスの長女イエニーが「フレンドおじさん」にだした「告白帳」の内容を中心に紹介したものの。
- 22) 杉本俊朗「エンゲルスと現代—生誕150年を記念して—杉本俊朗氏に聞く—」(『読書の友』405号, 昭和45年12月28日)
—本稿の内容は次の順序で展開されている。「生誕150年をどうとらえるか」, 「エンゲルスとマルクスとの関係」, 「マンチェスター時代の理論活動」, 「『資本論』の編さんをめぐる問題」。
- 23) 石田精一「エンゲルスの思想と現代性」(『前衛』, 昭和46年1月号)
—これは1970年11月12, 13日ベルリンで開かれたドイツ社会主義統一党中央委員会主催のエンゲルス生誕150年記念国際学術会議における発言を収録したもので「1. 資本主義の基本的矛盾の展開と公害問題」, 「2. 発達した資本主義国の革命運動の若干の特徴」とから成っている。
- 24) 向坂逸郎「エンゲルス生誕150年を回想して—そのマルクス主義への貢献—」(『社会主義』46号, 昭和46年1月号)
—向坂は、エンゲルス研究に対して次のように述べている。「エンゲルスに批判を加えてはいけぬ、というのではない。しかし、エンゲルスの叙述の仕方を低俗と考え始めたとき、たいてい人は、自らが低俗になっている。左右の日和見主義か、小市民的、大学教授的ペダントリイにおちている。エンゲルスはペダントリイをこの上もなくきらっている。のみのくそにもあたらない独創などというものを誇ろうと思つたことがない。」(17ページ)
- 25) 石田精一「エンゲルス生誕150年記念の2つの国際会議に参加して」(『赤旗』, 昭和46年1月17日)
—これは、先に紹介した同氏の『前衛』論文を中心に2つの国際会議でのエンゲルスの評価について述べている。
- 26) 『コムニスト』誌編集局「偉大な思想家、革命家—エンゲルス」(『新世界ノート』, 昭和46年3月号, 源出、『コムニスト』第17号, 1970年11月)

(b) 初期エンゲルス

- 27) 杉原四郎『「共産主義の原理」小論—エンゲルス生誕150年によせて—』(『現代と思想』創刊号, 青木書

店、昭和45年10月)

一本稿は、『共産党宣言』と、そのための準備手稿「共産主義の原理」との比較検討をおこないながら、初期のマルクスとエンゲルスの社会観、歴史観の異同をさぐっているのだが、なかでも「原理」の第20番目の問答が、『共産主義の原理』をエンゲルスの独自性を追求する資料として読む場合最も重要な問題をなげかけ(135ページ)ている、としている。

- 28) 土屋保男「エンゲルスの実像と虚像—広松氏『エンゲルス論』などの検討—」(『経済』, 昭和45年11月号)

一本稿の、その二「エンゲルスをわい曲するもの」の3「広松渉氏の『エンゲルス論、その思想形成過程』」で、次のように述べている。「……本書は、エンゲルスの独創性を空想的社会主義者や小ブルジョア急進主義者との対比において強調するあまり、マルクスとの関連を見失わせ、エンゲルス『過大』評価にみちびく危険を蔵するものとなっている。」(130ページ)

- 29) 村田陽一「訳と解説—新たに発見されたエンゲルスの著作『共産主義の信条表明』(1847年6月)

—共産主義者同盟の最初の綱領草案—」(同上) —「訳者まえがき」によると、これは、「1847年6月2日から9日までロンドンにひらかれた共産主義者同盟創立大会関係の記録文書」(136ページ)であって、『原理』、『宣言』との関連でみると、「この『信条表明』は、『宣言』の準備の第1段階、『原理』はその第2段階をあらわすことになる。」(137ページ)という。

- 30) 村串仁三郎「労働者階級の 実証的歴史分析の方法について—エンゲルス『イギリス労働者階級の状態』の方法の場合—」(『経済志林』 38巻3, 4合併号, 法政大学, 昭和46年1月)

一本稿はエンゲルス生誕150年を記念して書かれたものであるが、本紹介(8)の1—2)でも紹介した論文のあとを受けて、『状態』の方法論を問題にすることによって、『状態』のもつ基本的、本質的な問題を検討し(「はしがき」)たものである。

(c) 自然弁証法

- 31) 広松 渉「エンゲルス生誕150年、近代科学主義批判」(『日本読書新聞』, 昭和45年11月30日号)

—広松はまず、エンゲルスの『自然弁証法』は、「文献学的先決問題が存在し、旧来の版本をもとにした毀誉褒貶は抜本的に再検討する必要がある」としたあと、「筆者は『自然弁証法』の諸命題をそのまま承認するものではない。しかし論点としては破綻している幾つかの方面を含めて、エンゲルスのモチーフと発想には継承するに足るものが数多く含まれているように思う。」と述べている。

- 32) 宮原将平「自然科学とエンゲルス」(『文化評論』, 昭和46年1月号)

一本稿は、「自然科学研究の上でのエンゲルスの仕事の意義」について語っているのだが、それは次の3つの立場から論じている。第1に「唯物論の立場から」、第2に「不可知論に対する反対であり、自然認識における実践の意義について」の立場から、第3に「自然そのものが弁証法的であるかどうかという」立場から。

(d) 家族論

- 33) 布村一夫「『家族の起源』をめぐる—エンゲルス生誕150年記念—」(『歴史評論』, 昭和45年9月号)

—これは、『家族の起源』の第1版と第4版とのちがいについて、エンゲルスが民族学者であったとの観点から次のようにまとめている。「(1) エム・コワレフスキーの家族共同体理論をエンゲルスは考慮せざるをえなかった。(2) ファインス・ハウイトの階級婚の研究からうまれる見解に、エンゲルスはなかば同意している。(3) モムゼンがローマ氏族は族内婚的であったとする見解を批判して、モルガンをまもった。(4) ダーヴィンの乱婚否定をも否定している。」(45ページ)

(e) 民族問題

- 34) 石田精一「エンゲルスにおける民族問題と現代」(『前衛』, 昭和46年1月号)

—これは同氏が、1970年11月24日から26日までブカレストで開かれたルーマニア科学アカデミー、ルーマニア共産党付属歴史社会科学研究所などの主催理論会議で行なった発表からなっていて、(1)労働者階級の社会的解放と民族問題、(2)社会主義のもとでの民族自然の問題、について述べている。

(f) 国 家 論

- 35) 平野義太郎編『マルクス・エンゲルス国家と法—エンゲルス生誕150年記念—』(大月書店、昭和45年10月、旧版『マルクス主義の法理論』、大畑書店、昭和7年、白揚社→戦後昭和24年に暁明社から出版された。) 一本書は、平野義太郎編『レーニン国家、法律と革命』、『レーニン、戦争と平和、帝国主義』の続編にあたる三部作の一つで、マルクス=エンゲルスの著作のなかから、法と国家にかんする重要な文献を選び、体系的に編集したものである。』(「凡例」)

(g) 婦 人 論

- 36) 石田卓「エンゲルスと婦人論—生誕150年に—(上)、(下)」(『赤旗』、昭和45年11月24日、25日)
—石田は、エンゲルスの女性観を次のように紹介している。「エンゲルスは、女性を子を生む道具、快楽の対象、カクテル・パーティーの主人の装飾品等とみるブルジョア社会の女性観をはげしく排撃しました」。そして、エンゲルスが描いた未来の社会においてこそ、「愛は、いわゆるエロス、尊敬も信頼も誠実さもない獸的欲望をみだす奇形児の性愛ではないこと、そこでの結婚生活は人間全体の一部となる」。

(h) 芸 術 論

- 37) 永井智雄「若きエンゲルスの遺産にふれて」(『経済』、昭和45年11月)
—これは、エンゲルスが二人の友人に送った次のような手紙の一節をとりあげて、エンゲルスの人柄とその芸術性について語ったものである。つまり、「マルクスがいたあいだは私は第2ヴァイオリンをひいた。—1884年10月、ペーカーにあてたエンゲルスの手紙」。「叙事詩的な、おちついた描写をまじえた、 \dot{i} 語で対象の的をはずさぬひきしまった簡潔性と含蓄性、はなやかな形象と輝しい機智のひらめきをまじえた単純なことば—エンゲルス・1839年文体について、グレーバーにあてた手紙—」
38) 小場瀬卓三「典型と細部の真実について—エンゲルスの芸術論に寄せて—」(『文化評論』、昭和45年12月号)
—本稿は、エンゲルスの芸術論を「ハークネスあての手紙に書いた、あまりにも有名なリアリズム論を文学史の具体的事実を照らして」(63ページ)解釈したもの。

(i) 文化・語学論

- 39) 土屋保男「エンゲルスと語学」(『文化評論』、昭和45年11月号)
—ここでは、マルクスとエンゲルスの語学学習法のちがいと、しかしながら、語学に対する二人のとりくみ方の情熱の点で同じであったことが興味深く語られている。
40) 同 「エンゲルスと文化(1)~(6)」(『赤旗』、昭和45年11月27日~12月2日)
—本稿の内容順序は次のとおりである—①「エンゲルスの書棚」、②「文芸的才能」、③「若きエンゲルス」、④「演劇への造詣」、⑤「音楽とスポーツ」、⑥「エンゲルスの予言」

後 記

本稿の発表を予告してからすでに一年以上にもなる。もっと早く発表せねばならなかったのだが、適当な発表の場がなかったことや、すでに戦後のわが国のエンゲルス研究の素描が杉原教授によってなされていること、更には、本来研究者の文献紹介は、できるだけ強い問題意識に立脚した研究史的紹介でなければならぬだろうこと、等々を考えて躊躇していたので、今日までのびのびになってしまった。しかし、「戦前」の抜刷をお送りした諸先生方から、「戦後」の発表をぜひという身にあまるはげましのお葉書をかなりいただいていたし、やっと発表の場

を得ることができたので、大変遅れてしまったけれども、何とかここに発表することになったしだいである。もともと、前稿および本稿は杉原四郎教授の研究に対するお手伝いの副産物であり、教授のご指導と資料のご提供のたまものである。もちろん内容に関する不備な点は全て私に帰するのは当然である。 (1971年7月27日)